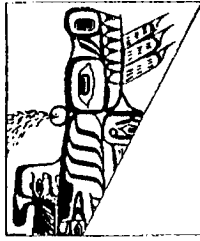


III

第六回公開講座



JAPAN JUNG CLUB NEWSLETTER

☆ WINTER ☆

編集・関西事務局 神戸市東灘区岡本8-9-1甲南大学文学部社会科学科内☎078-431-4341(内)560
発行・日本ユングクラブ事務局 東京都大田区山王1-37-3山王教育研究所内☎03-775-8155

1989.12.15 No.24

深層心理研究会

<第6回公開講座のお知らせ>

谷口文章

本研究会は、1989年の4月から、甲南大学総合研究所の研究チームに昇格しました。新たに、氏原寛(大阪市大・心理)織田尚生(甲南大・心理)中川米造(滋賀医大・医)小出龍太郎(浪速短大・仏文)谷本泰三(甲南大・米文)永友育雄(甲南大・経済)藤本建夫(甲南大・経済)寺嶋樵一(甲南大・国文)森茂起(甲南大・心理)の諸先生及びその他多数の先生方の御参加により毎月1回研究会をもって参りました。チームは「人間の深層心理と社会の深層構造」というテーマで、幅

広く、個人の深層心理と個人がおかれている社会の深層構造を明らかにするために、ユング心理学、精神分析学、医学、経済学、文学、哲学などを学際的に研究しております。

記

講師：中川米造先生(阪大名誉教授・医学)

題目：医療の神話

場所：甲南大学10号館(JR本山駅or岡本駅)

日時：1990年1月13日(土)午後1:30~4:00

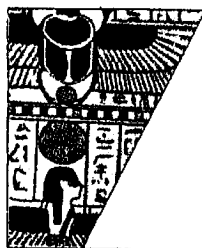
参加費：500円

◎参加手続きは、名前・住所・電話・職業をハガキに記載の上、1990年1月10日(水)必着でお申し込み下さい。⇒神戸市東灘区岡本8-9-1(〒658) TEL.078-431-4341 (内 553) 甲南大学文学部 谷口研究室

(研究会幹事・甲南大学助教授)

(日本ユングクラブ・ニューズレター NO.24より転載)





JAPAN JUNG CLUB NEWSLETTER

◆ SPRING ◆

編集発行 日本ユングクラブ事務局 東京都大田区山王1-37-3山王教育研究所内 TEL. 03-775-8155

1990.3.15 No.25

深層心理研究会・公開講座の報告

谷口 文章

1990年1月13日(土)、深層心理研究会主催の第六回公開講座が甲南大学において開かれました。「医療の神話」という題目による中川米造先生(阪大名誉教授・医学概論)の講演は、先生の巧みな話術と暖かい雰囲気の中で、満席の会場と一体となって展開されました。会場は、先生御持参のミヤシタ・フミオ作曲の「瞑想」がB.G.Mとして流され、どことなく東洋のイメージが漂う中からお話しがスタートしました。

今、現代医学そのものが硬化した神話という袋小路に入っており、その状況を越えるためには、もう一度柔軟で生命力のある神話が必要であることを強調されました。O.H.Pを使われながら、①神話とは何か、②近代医学の神話、③ガン神話、④硬化した神話からの解放の順に「医療の神話」の問題点が指摘され、最後に現代人にとって本当の意味の神話とは何か、について述べられました。その内容を御紹介しましょう。

(要約)近代医学は、その起源を16世紀半ばの法王庁の禁令を無視した解剖に求め、その解剖によって明らかとなった身体内部の異常や変化が病気の本体である、という神話を19世紀に確立した。屍体解剖を起源とするこの考えは、病気は病者自身ではとらえられない体内にあるため、専門家としての医師に自身をまかせれば安心という神話をさらに生み出した。また、病気を診て病人を診ない医学や、神のような万能さをまとった医師と人権を剥奪されたアノニムな患者という医療神話もここに起因している。近年の様々な調査から、罹患率の推移が近代医学の発達に必ずしも比例的でないことや、また現代では医原病の増加が指摘されており、これまでの、「医療の神話」は崩壊しつつある。“病い”の主体になり得る私たちが、健康の重要なファクターである環境や行動に目を向け、医療に参加するならば、硬直化した神話は賦活化され、躍動する神話へ転化する。この時“癒し”としての真の医療が新たに生まれるのではないだろうか。

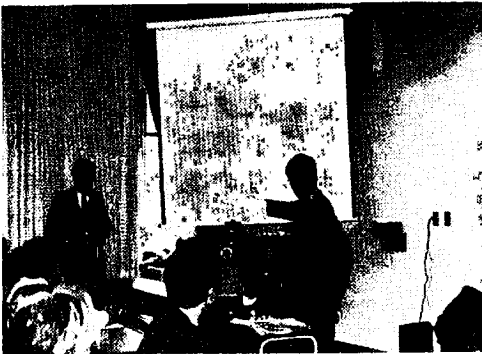
中川先生は、以上のような一見堅いお話を、ユーモアを交えながら

和やかに進められました。会場の討論やアンケートの中から特に印象深かった意見を記しておきます。たとえガンであってもそれを自覚し受容することによって、病気と共に生きていけることに感動した。新生児と母親との基本的安心感が人間信頼やセルフ・エフィカシーの原点であることを知った。ライフ・サイクルの中で人はそのような原点に立ち戻り新たな可能性や自然治癒力を見い出せるのを知って安心した等々。

このようにして、私たちはいわゆる“病い”をもっているも健康に生きていけるという新しい神話を得たのでした。

(甲南大学・研究会幹事)

(日本ユングクラブ・ニューズレター NO.25より転載)



アンケート

深層心理研究会 第6回公開講座 アンケート

氏名：伊藤 香織

物事を抽象化させ、一般的にして問題解決させることは、無論大切なことだと思います。しかし、人の抱えている問題は具体的なもので、その個人の問題を一つずつ解決していくことがひいては万人の幸福につながるのではないのでしょうか。現代は合理化という名目で人間を一括し画一化してきましたが、それ故に人間疎外をはじめ、今日お話のあった現代医学の行きづまりなど様々な問題を持つようになったのだと思います。人類全体の幸せは、人間一人一人の幸せによってなるものですから、もっと本来の自己にかえること、最近よく言われる個性の尊重が、本当に大切なのだなあと思いました。“人間は合理性ばかりでは生きていけない。そして、必要な合理性と非合理性を結びつけるのが神話である。”というお言葉を、医学的なものとしてのみでなく、生きていく上での基本的な考え方としてかみしめました。

氏名：奥野 浩一

今まで哲学や、心理学を学んできて、知らず知らずのうちに身体と精神をある意味で切り離して、精神面(理性)の方のみを重視して考えていた様に思われる。それが今回、ガン告知の話や例外的患者(give upしない患者)の治癒の問題等について聞くうちに医療という面から心の問題を見ることができ、改めて精神と身体の間わりを認識することができた。また、自我の確立が心身共に大きな意味を持つことも知った。

氏名：乙武 英明

今日のお話や、現在の日本の状況を考えると、人間と自然の相関性や人間と人間の関係性が失われてきているように思いました。また、その重要性も確認しました。今、求められる医療は何であるかを考えると、医者と患者が同じ立場に存在し、対等な関係づくりを通して、治癒することが望まれているように思います。それは医療の分野においてだけでなく、人間と人間を取り巻く状況との関係においても言えると思います。

氏名：中田 淳子

一般的な見解では、医学の進歩はめざましく、よって、病気に関し

ては展開は明るい方に向かっていると考えられている。しかし、どれほど高度であっても、つまり、外的な技術がどれほど進歩しているとしても、人の身体の病および内的な病の発症は変わっていない。この講演でもおっしゃっていたように、重い病気でありながら、医師の助けなしに自分自身をコントロールし回復させることができる人がいるという事実。そのことには何か本質的なものを考えさせられた。医学のみに限らず、現代社会における全ての人工的、科学的な外的進歩の中で、自分自身を見つめなおし、理解するのは重要なことだと思う。

医学に100%頼り、まかせてしまうのではなく、それを自分のものとして取り入れる。大きな力に安易に流されるのではなく、どんな場合でも核とするべきものは自己の自覚と、その責任であるということを考えさせられた。

氏名：長谷川 純子

“医療の……”ということでは堅苦しいだけのお話なのかな……と想像していたのですが、大変楽しい、そして興味深いお話をきかせて頂けてとても嬉しく思います。この講演の中で私が感じたのは、中川先生は“医療の神話”と共に“固定観念の神話”についておっしゃっているのだろうということです。世間の評価、前例等にとらわれず、自分自身でまず考え行動し、またそれを自分自身で信じていくことができるならば何も恐れるものはない、ということをおっしゃりたかったのではないのでしょうか。人生全般に通じるお話であったと思います。もちろん医療に関しての諸々のお話が大変良い勉強になったのは言うまでもありません。

氏名：東口 麻知子

今回の講演を聞いて、医療というものが身近かになったイメージがあったが、現代医学が必ずしも完全無欠なものではないと思った。



病は科学だけでは解決されるものではなく、精神、心理、宗教的なものetc.の方がより大きな影響するものだと思った。中川先生は「医療の神話」というものから完全離脱するのではなく、それに包まれた発想をお持ちの方だから、束縛されることのない自由な視角をもつ人間性にあふれる研究者だと思った。

氏名：山下 正憲

人間を医学という立場をふまえた上での講演は、新たな発見であった。自己の認識によって自分が変わってしまうのなら、人間とは何と神秘的なものであろうか。人間の強さ、弱さは、やはりメンタルな部分が大半を占めていると思ってはいたが、医学の立場から言われてみて、改めて人間のすばらしさを感じた。

ただ、医者でガン告知について、口をにごしてしまう人が70%もいるのには正直言って驚いた。やはり、人道に反する行為と思える。なぜなら、患者は告知を望んでいるし、告知されても強く生きられるはずである。本来の人間ならば……。

氏名：松本 智子

今までただ受け身ですがるだけであった医師、医学に対する見解が変わりました。“自己を確立する”あるいは“自分をコントロールすること”により、自分が変わり病までも変えてしまうのだということを確認しました。イメージの中で我々は、暮らしているのだという認識は、人間にとって大切だと思います。

氏名：野原 美香

医療に関して、いろいろな話を聞いたが、治療が思っていた以上に心と密接に関わっていることに驚いた。医療は科学の最先端分野であると考えられているが、技術ばかりが先走っても効果がないというよ



うな気がする。また人間の気の持ち方一つで、ここまで変わるものだなあとも思う。ガンのイメージ画の話が途中で出てきたが、私もイメージ・トレーニングという講義をとっていたので、このような分野にも活用されるのだと思い、心の学問の重要さも再確認した。

氏名：高谷 紀美子

精神と肉体の結び付きについて改めて考えさせられた。医療というのは科学的な分野なので、“病は気から”という言い回しがあるにもかかわらず、どうしても病気は自分では治せない、医者が治してくれるものであると思っていた。精神と肉体の関係は不思議なものだと思った。私は心理学専攻なので感じたのだが、「死ぬんでしょうか？」と言われた時おうむ返して共感して対応するというのは非常に大切だと思った。表面的に対応するのではなく、相手のその様な不安な気持ちをこちらも共に感じていくことが大切だし、また心の中にあるイメージも共に味わっていくことが必要だと思う。“医療の神話”というテーマの講演を聞いて、どんな分野のものでも“神話”というものが存在するんだなあと感じた。

先生のお話はとてもわかりやすくおもしろかったです。

氏名：伊藤 俊一（学外からの参加者）

先生のNHK市民大学講座「医療の文明史」を見させていただき、大変得るところが多く、老後人生に役立てていただいております。直接、会場でお話をお伺いして日頃思うことに共感を覚えることが多く、有り難く存じました。

私は、病気は人類の存続のためにはマイナスではなく、ある意味では絶対に必要なのだと発想転換して考えているのですが間違っているでしょうか。それというのも、病気に立ち向かうからこそ細胞は刺激され健全な状態を保つのであり、病気がなくなれば細胞は弱体化し人間の活力ある存続はありえないと考えるからです。

レポート

医療の神話について

甲南大学 文学部 三回生 平岡 未央

「医療の神話」と言われても私には身近には感じられない。ただ医療関係者の「医者」というだけで、盲目的に人を治す力があると思い込んでいる私には、ここ最近、話題になっている脳死や臓器移植、さらにその核心である倫理問題なども、雲の上の話のような感を覚えてしまう。つまり、病気になるったり、怪我をすれば病院へ行く。そこへ行けば、治してもらえるのだと思っている私のような人間が、現代の「医療の神話」を創りあげていると言ってもいいだろう。なにしろ、医学は「絶対」だという考えが、その根底にはあるのだから。しかし、実際は、病は治してもらうのではなく、自らが治すものだと言う。中川米造先生が講演の中で示された一例であるが、末期ガンで手のつけようがなく、生存できるのはあとわずかだと診断されていた人でも、何年も生きている人がいるという話だ。こういう人達に共通する点は、自我の確固とした人達であるということである。近代医療の診断以上に、自分の意志でその病を乗り越えようという人たちなのだ。どうやら、現代医学は絶対だと思って、素直にしていると、うまく回復しないこともあるのかもしれない。要するに、発想を転換して、医者は治療の手助けつまり道路の道案内で、患者がその道を歩く主体であると思っておく方がいいのかもしれない。

私が、なぜこの中川先生のお話が、特に印象深かったのかを考えると、やはり、人間の精神力というか、そういう科学では解明されることのない不思議さというものの証明であるかのように感じたからである。

生と死とは常に隣合わせのものである。最近、新聞で見たのだが、脳腫瘍で、もう助かる見込みがないという数学者が、自分の体を生きたまま、冷凍保存して、将来、末期の脳腫瘍の治療法が確立した時に解凍して治療してもらおうという話が載っていた。人間の、いつまでも生き続けたいという願望は、それほどまでも強いのだろうか。死に直面する状況を経験したことのない私のような人間には、わからないのだと言われれば、それ以上何も言えない。しかし、ある時読んだ釈迦の一つのエピソードが、私には大変興味深かった。それは、こういう話だった。ある所に、死にかけている息子を持った婦人がいた。その婦人は、どうしても息子を生きさせたくて釈迦の所に、どうか助けてほしいと頼みに行った。すると釈迦は、こう言われた。「今までに人

が一人も死んだことのない家を探して来なさい。」と。婦人は一所懸命にそんな家を探したが、一軒もなかった。そして釈迦にそのことを訴えると、釈迦は、「死ぬということは、いつかはやってくるものだ。」と言われた。

理性を重視し、感情の世界を切り捨ててきた現代医学は、やはり、死ということ、今までは違った側面から考え直す時期にきている。生きることは死ぬことと切り離してはいけないということだ。社会的コンセンサスを得ないまま、臓器移植が本格的になればなるほど、死んだ人間は、まるで使い捨ての感覚で切り刻まれては、感情的にたまらないと思う。倫理面からの問いかけは、簡単に割りきれたり、答えの得るものではないと思う。答えのないものだから、なおさら切り捨てたりせず、慎重に考えていかなければいけないのだと思っている。

医療と人間性

甲南大学 文学部 三回生 松本昌樹

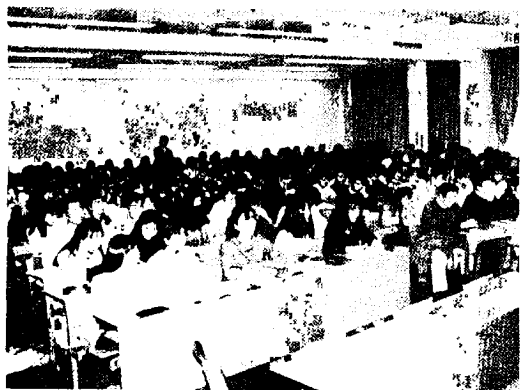
中川米造先生の講演「医療の神話」をお聞きして、医療のあり方や医者と患者の関係およびガン告知や臓器移植などの近年話題になっている問題についての私個人の感想を書きたいと思う。

私たちが子供の頃から持つ医者に対するイメージは、“偉い”、“賢い”や“怖い”などで医療に対しても全幅の信頼をもつようなものであった。それが大きくなって抜けていないようだ。例えば、講演の中であった医者の座る椅子と患者のそれとの大きさ、立派さの差によって患者の畏怖感が増長されていることなどを聞いてみると、なるほどという感じがした。病気などで苦しみ不安になっている者が、精神的にも頼りにしようとしている時、畏怖感と絶対性を煽るようなことをしてい



る医者の本래の姿とは何であるのかと思う。しかし他方では、患者となる私たちの側にもこのような状況を生む原因の一端はあるのではなないだろうか。少々の風邪でもすぐに病院に行き、言われるままに薬を飲む。また一年間を通じて、同じ快適な温度を保つ室内に暮らし、自然本来の気候に対して過剰なほどに防御をする。このような生活が小さな頃から当たり前になれば、私達の体がつ自然の治癒力も何もあつたものではなく、自分自身に病を治そうという気がなくなり、医者のもとへ行くのは当たり前かもしれない。確かに専門的な知識、技術を持つ医者という職業は重要なものであり、そのような人の苦勞、努力は並大抵のものではないだろう。私たちはそのような人々のもつ専門的なものを、ただ一方的に施されるのではなく、医者との協力を得て、自らが治るといふ姿勢が大切なのであろう。

講演を聞いた学生が一番関心をもつたのは、やはりガン告知と臓器移植の問題のようだった。私個人としては、臓器移植に関しては、提供するものもされるものも拒否したい。提供するのを拒むとエゴイストのようと思われるかもしれないが、いくら死んでから（これも脳死の問題などあると思うが）とはいえ、自分の肉体の一部が取り去られるのは、あまり想像したくないものである。また逆の場合も誰か他の人の体の一部が、自分の体内で生きていると考えるのは、あまりいい気分のものではない。ただ、もし自分の子供や大切な、文字通り生命より大事だといふ人のために、自分の臓器を提供する人もいるだろう。それはそれで、純粹にそういう決心をするに至つた心は素晴らしいものであると思う。しかし人間は電気機械ではなく生きて心を持つ生物であり、その肉体の一部を部品を交換するように簡単に移植が行われているとすると、そこには生きるだけでなく死ぬことをも含んだ人間の尊嚴といふのは、果たして存在し得るのかどうかは疑問である。ガン告知の問題は、もし私が今ガンを宣告されてあと何年と言われても、その残された人生をどのように生きるか、私にはそれを充実した



ものとする自信はない。まだ治療が可能な段階であったとしても、その病名を聞いただけで、暗く逃れようのない死神のようなそのイメージが付きまとい、精神的にまいってしまうだろう。だが何も聞かずに知らない間に、自分の肉体が蝕まれているのも恐ろしいし、どちらとも言えないようだ。

ガン告知にしても臓器移植にしても、そこに患者個人の人間性を抜きに考えることはできない。医療における人間性とは何か。例えば外科手術で腹部を切開する場合、私たち一般人からみると、生きている人間の体を切ったり縫ったりするのは考えられないことだが、それをする人々がいる。人の命を救うための使命感によってそれができるのかもしれないが、自分の親兄弟でも同じようにできるのだろうか。人間はある意味では、血と肉でつくられた非常に精巧なロボットかもしれない。医療においてはその機械的なしくみが大事なかもしれない。しかしそこに大切な何かが抜け落ちることがあってはならないのではないかと思う。

講演を聴いての感想文

回生看護学院 十回生 高木 浩美

「神話」という言葉は、遠い過去の物語のような神秘的な響きをもっている。今まで神話という意味を深く考える事はなかったが、講演の後、その意味を考え直してみると、私達の日常に遠いようで近いものであることに気付く。近代に関しては、講演のなかで述べられたガリレオの地動説や、ヒトラーなど……ひとつの神話がつくられて、やがてそれらが崩壊する事で時代が変わっていったという事実、改めてその力の大きさを感じるのである。

また思うことは、それらの神話がつくられ崩壊するのに、どれだけの人間の努力と血が流されたか、という事である。ひとつの神話をくつがえすのは、容易な事ではなく、又、疑問を持つことでさえ、難しいことかも知れない。現代の私達はどうか？根拠のはっきりしない、間違った神話を、そのまま信じてはいないだろうか。私自身も、中世に生きていたら、きっと地球が丸いとは信じなかったと思う。今、自分の周りには、科学的、医学的に解明された正しいものであると思いがちである。特に私が日常関わる医学、看護の分野においては、そうなりがちである。学校で習う教科書の内容を、次から次ぎへと頭に入れ、臨床の経験を積んでいく。その中で得たものを絶対のものとして自分を鍛えていく事は、必要な事であろうが、そこに別の視野をもつ事も、大切な事であろう。しかし何も地球は四角いのでは？とまではいかなくとも、柔軟な発想や気付きのできる人間

であれたらいいと思う。

かつて、病は魔物のせいといわれた時代であったが、いまは分子医学の時代である。ここまでくれば、きっと色々な疾患の完全な治療ができるんだ、という神話を私も信じていた。けれども病気の数は確かに減ることはないし絶滅した病気というのは、天然痘ぐらいしか浮かばない。病気とは大変漠然とした言葉だ。私達、医療の現場で働くものには、切って離す事の出来ないその言葉である。病気がって何なんだろう……と、ふと変な疑問を持つことも時々ある。だからこそ、患者さんとドクターの関係、これが不安の関係、GIVE-UPの関係であったならば、そこから病気が始まるという言葉は、本当に納得できるのである。

ガン神話の話は聴いていて、どきどきさせられた。私のわずかな臨床経験の中でさえ、どれだけたくさんの方が、ガンで命を落とされただろうか。死の瞬間に出会う度に何とも言いようのない気持ちでいっぱいになってしまう。そして気がついたことは、私自身がどれほどガンを特別視していたか、という事である。がん告知は確かに大きな社会問題であると思うし、告知をする事が必ずしも正しい解決であるとは思えない。しかし、講演の後、もうひとつ気付いた事は、告知は患者さんにのみされるのではなくて、同時に私たち医療スタッフにもされているのだという事である。例えばある患者さんが、がんであると診断されれば、スタッフはぐっと身構えるものがあり、過敏になる。カンファレンスが行われ、統一した態度で接するよう申し合わせたりする。しかし、いざ治療が始まると、患者さんは疑いを抱きはじめる場合が多い。薬が変わったり、入院が長引いたりするのであるから当然だと思う。患者さんのしぼり出すような問いかけに、私たちは、ウソを言い続けなくてはならない。思い出されるのは、以前ある卵巣がんの患者さんの部屋に行ったとき、テレビである若い女優が胃癌で急死したというスクープが流されており、その人はそれを見ながら、「わたしと一緒にや」と言ったのである。やせているせいもあったろうが、生きる人間の力というものが、全く感じられなかったその人の背中は今でも忘れる事が出来ない。もしも、はっきりと「もうダメなんですね」と言われたら、私はやっぱり「がんばりなさいよ」としか言えないと思う。

サージカルセコンドオピニオンの話は、とても明るい気持ちになれた。医療の常識を逸脱する人は、スタッフからは敬遠されがちである。自分なりの医学知識をもって譲らない人は、はっきり言って大変扱いにくい存在である。どんな病院にも、たいてい赤丸要注意の患者さんがいるだろう。それを別の角度から見て、自我の強い人であるという考え方はしないで、わがままだとか、自分勝手な嫌われ者とかみなさない事が多い。確かにこういう人には、手を焼かされるが、結局病院というのは、色々な意味で、スタッフ中心の部分の大きいのかも

れない。看護婦は特に日常の業務をこなすのに精一杯で、極端にペースを乱される事を恐れている部分がありはしないだろうか。けれども、こんな自我の強い人たちが、ガンに真っ正面から挑んでいるとしたら……。

私が抱くガンのイメージはデコボコの真っ黒な“物”である。決してよくない。イメージの呪縛にしっかり捕われていて変える事は容易ではない。しかし人間の機能にイメージで克服できる部分があるとしたら、その可能性はすごい。信じたいと思う。

患者中心の看護でありたいと日々学びながらも、その実、人間性を無視した医学の歯車に乗ってしまう自分を発見することもしばしばである。人間の健康にとって、ほんの一部の医療であってもそれに関わる人としてのありかたを、考えさせられる講演だったと思う。

病気とは必ずしも決まったパターンで進むものではない。たとえガンであっても……スタッフとして決して勝手な真似は出来ないがその人なりの闘病があるのだという、当たり前の事を、もう一度考えなおしてみたいと思う。



IV

学園生活の一風景

講義「イメージ・トレーニング」

1990年度「イメージ・トレーニング」講義内容

文学部 谷口文章

序章 イメージ・トレーニングと哲学

「イメージ・トレーニング」という専門科目（半期）は、文学、心理学、体育、哲学の研究者が集まって行われる学際的な授業である。この講義は、昨年度（1989年）から始まったが、イメージをベースにしながら各専門分野から講義がなされる。

さて、筆者の担当は、「催眠法の理論と実際（VTR）、自律訓練法における実習」であり、それは特に催眠法の基礎理論の啓蒙を目的としている。というのも、催眠法に関する誤解を明らかにするとともに、あまりかえり見られないその技法が“人間の心の問題”に大きな解決をもたらすことを示したいからである。

それと同時に、デカルトの心身二元論を超克するために、催眠現象は大きな示唆を与えると確信している。この意味で、この科目は筆者の哲学を構築する上で大きな位置を占めるのである。

では、アイスキュロスの「プロメテウスよ、御身はこの諺を知らないのか。言葉は乱れた心の医師だという。」（「縛られたプロメテウス」）という名言の意味を諸君と共に明らかにしよう。

第1章 催眠 Hypnosis とは何か

§1. 催眠の歴史

(1) ヒプノス

催眠の歴史は、エジプト、ギリシャの神官が宗教的目的に催眠を役立てていたようであるが、古代ギリシャではすでに催眠が治療の目的に使われていた。ギリシャにヒプノス（Hypnos）という夢の神様がいた。催眠という言葉（Hypnosis）は、ギリシャ語のヒプノス（hypnos = sleep）から由来する。

「ヒプノスよ、神々の中でいちばんもの静かな神よ、心の鎮め役、悩みつかれた胸の慰め役よ。」（ギリシャ神話「かわせみの話」）

○宗教、医学的治療でもあった …………… ex) イエス・キリストの信仰

○眠りと催眠の類似と相違 類似点は心の安らぎにあるが、相違点は前者の生理的欲求の充足に対し、後者は人為的に生ぜしめられた心的状態である。催眠は人間の精神構造を明らかにし得るものと考えられるが、学問的には未開拓な心の分野である。

(2)動物磁気説

中世になって一旦忘れられていた催眠は、ルネッサンス時代の訪れとともに、再び注目されはじめた。17c前半には、例えばニワトリに対する催眠のような動物実験が奇跡の実験として興味を集めた。

<動物実験>

- 持続して口をあけられるとそのままの状態になるワニ (cf.資料①)
- ひっくり返された時のニワトリの不動姿勢、白線でかこまれると外に出られなくなるニワトリ
- へびににらまれて身動きできないカエル 等々

この現象を説明しようと、当時の学者達は種々の催眠学説を作り出した。スイスの医師パラケルスス(P.A.Paracelsus)は、人間は手・目その他の器官から発する神秘的な生命力の仲介によって、他の人の体や心に影響をおよぼすことができると考えた。この仮想的な力は、はじめはフリユイド fluid:流動体(人体から出る放射線)と名づけられた。その後このフリユイドは、磁石によく似た作用を動物に及ぼすと信じられ、「動物磁気」と改名された。

(3)メスマリズム

18c後半になって、ウイーンの医師フランツ・アントン・メスメル(F.A.Mesmer 1734-1815)が、動物磁気説を体系づけた。つまり、古来行われてきた治療法と磁気理論にヒントを得て一種独特の催眠法を案出し、動物磁気説を公けにして、ウイーンに診療所を開いた。

<メスマルの催眠法と理論=メスマリズム>

i) 学説

人体の両半分は、いわば生きている磁石の両極のような働きをしており、その動物磁気のバランスの乱れが病気の原因になると考えた。病気の治療法は、自分にそなわる磁気力を患者に放射してそのバランスを回復させる。

ii) 方法

- (メスメルの方法) (現代の催眠理論による分析)
- 一回の治療を30名までの集団に施す。.....自己防衛がはずれやすい
 - 患者は完全な沈黙と注意の集中。.....暗示の前段階
 - 水、鉄くず、雑草、左右対称にならべられたビンを入れた大きな樽のまわりにすわらせる。.....論理的思考、批判力の枠をはずす
 - 樽からは、鉄の棒がつき出していて、その端を患者が持って自分の体の悪い所にあてる。.....症状の確認と暗示の開始
 - 音楽が流れはじめると、メスメルは長い派手な絹の衣装をまとって、突如として現れ、大げさな身振りで、患者たちの間を通り抜け、患者をジッとみつめたり、体にさわったり、一人一人長い棒でふれたりする。.....背景の準備、被暗示性の亢進、権威的・強制的催眠
 - すると患者は、2、3回このような治療を受けただけですっかりなおったと報告した。.....自律性の解放・中和の原理(自律訓練法)

iii) メスメリズムに対する批判

メスメルがフランスに来てから5年後、フランス政府は、メスメルの主張が正しいかどうかを審判するために、委員会を招集した。この委員会での調査と公開実験の結果、メスメルのような流体の存在は完全に否定された。このようにして彼の名声は地に落ち、その説は葬り去られた。

しかしながら、磁性流体の作用とみなされていたものは、すべて患者サイドの“イメージの作用”(暗示の効果であって磁気的作用ではない)によるものという重大な発見がなされた。

(4) 催眠の医学的治療に対する適用

19c後半になって、フランスのリエボー(A.A.Lièbeault 1823-1904) ベルンハイム(N.Bernheim 1873-1919) シャルコー(J.M.Charcot 1825-93)などの研究によって、ついに催眠は「医学的治療法」の一つとして認められはじめた。

<催眠の神経症への適用>

i) 1880年頃、ウィーンのブロイエル(J.Breuer 1842-1925)は、ある女性のヒステリー患者を治療していて、「意識の表面に出ることができず、心の底に抑えこまれていた感情を催眠下で発散させると症状が消える」という発見をした。

カタルシス法:

..... 抑圧され、はけ口を失った心のエネルギーが身体症状に転換されているため、催眠で自我防衛をゆるめ、そのエネルギーを放出する。

ii) しかし当時の催眠は強烈な直接暗示によって症状をおさえつけてしまう方法（権威的・父権的催眠）であった。

(5)フロイトと催眠

フロイト (S. Freud 1856-1939) も初期の頃ブロイヤーと共に、催眠法を使用してヒステリーを治療し、また研究していたが、やがて問題が生じ催眠法を放棄する。

<フロイトによる催眠法の放棄>

i) 転移の問題

催眠療法をやっていると、医者・患者間に濃厚な人間関係ができこれが治療のさまたげになる。

—— 依存的な感情転移が生じる。

ii) 抵抗の稀薄性の問題

精神分析では自我強化をはかることにより、人格変容を達成（自己実現）するのであるが、催眠法ではそのための重要な要因である抵抗現象が生じにくい。

—— 抵抗、アクティング・アウトなどを経ながら自我のゆがみを自己の力で修正するが、そのプロセスが生じにくい。

iii) 治療効果の持続性の問題

催眠の直接暗示や感情発散の治療効果には限界がある。

—— カタルシス効果のみだけではなく、自我強化が必要である。

↓

権威的で父権的な催眠では患者の自我を無視して、症状を抑えこんだりムリヤリ心の奥底にあるものをはきださせるため、その効果が一時的になりやすい。

—— それはフロイトの時代の強制的な自我支配を行う催眠法という手法が原因である。

フロイトは上のような理由で催眠法をやめ、額に手をあてて原体験などの問題点を連想させる「前額法 forehead method」を工夫したりしていたが、最後には「自由連想法 free association method」を確立し、精神分析学を創設したのであった。しかしながら、フロイトが当時の催眠法を放棄したとはいえ、もし、今日の催眠法で行われるように、患者自身のペースにそって患者の自我を強めながら、受容的に進めていく技法（受容的・母性的催眠）を知っていたら、おそらく催眠法を捨てることはなかったであろうと思われる（池見酉次郎）。さらに、現代では公式化された自己催眠も考案されており、自らの力でカタルシス効果と、自我強化が計られることも可能となっている

(シュルツ)。

ex) 自律訓練法：公式化された自己催眠

§ 2. 催眠の定義

「催眠とは、人為的にひき起こされた状態であって、種々の点で睡眠に似ているが、しかし睡眠とは区別でき、被暗示性の亢進および通常とは違った特殊な意識が特徴的で、その結果、覚醒に比べて運動や知覚、記憶、思考などの異常性がいっそう容易にひき起こされるような状態をいう。」(成瀬悟策)

—— 催眠法と呼ばれる一定の科学的手続きの下に、意図的・人為的にひき起こされる、人間有機体の特殊な状態、およびそれをもとにして生じる心理・生理的な変化の一連の現象。

↓

教育、医学・心理治療に活用

このように催眠とは、一定の体系化された操作によって、被験者の被暗示性を高めた状態を作り、それを教育や種々の治療に応用しようとするものである。

<精神分析と現代の催眠法との比較>

精神分析：分析中に一種の精神的退行（幼児帰り、年齢退行）が生じる

…… 「自我の支配下における退行」であって、患者の成人としての自我の働きの停止によってではなく、自我の働きの変化として、このよな現象がおこる。

催眠法：かつて自我の働きの無視され、自我が弱体化するので、このような状態の下での治療は危険と考えられていた。

↓

しかし、近頃の新しい技法による催眠下における精神分析の研究から、催眠下でも自我の支配の下で退行が生じていることがわかった。

…… 催眠下でも自我の働きの保たれており、意識・前意識・無意識と心のすべての層にわたる働きが営まれている（cf.④）。

◎ こうして、精神分析と催眠法は現代ではきわめて類似した現象であることが確認されており、しかも後者の速効性というメリットが高く評価されている。

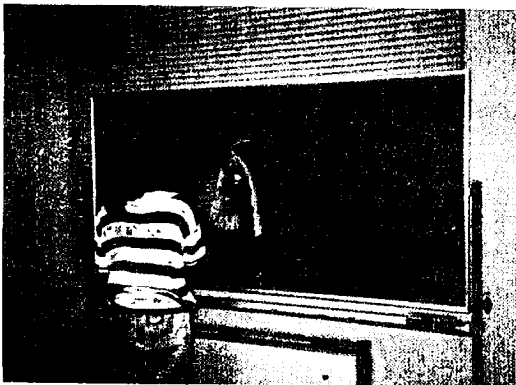
§ 3. 催眠のメカニズム

一つのことに注意の集中がおこると、それに対する脳の一部分が興奮し、脳のその他の部分の働きは、全体として制止される（cf. 動物催眠）。催眠の場合、被験者の注意は、光る物体やメトロノームの音に、やがて治療者のコトバや指図に集中的に反応し、他のすべての外界からの刺激には反応しなくなる。

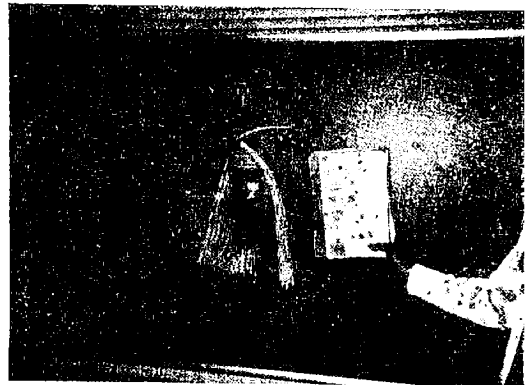
意識野（意識の範囲）が狭くなり、内外の出来事に対する意識は全体的に低下し判断力や批判力は弱まるが、ある一点に対してはむしろ鋭敏になり、集中力が増す。

そして、脳が一つの信号に強く反応している時には、他の脳の部分の活動が低下するだけではなく、大脳皮質からの指令で網様体からも神経系にマイナス信号が送られ、それ以外の信号を途中でおさえて大脳皮質にとどかないようにする（cf. ③）。したがって、一つの信号に集中的に反応して暗示の大きな力が発動する。このことにより、新皮質系を中心とする批判的で意識的な「自我」の力が弱まり、生命を支えている古皮質系の本能部分の働きが活性化され、本来的「自己」が発現されることになる（cf. ②）。

◎ VTRでは、種々の催眠の深さにあわせて、手の浮動、重感などの類催眠から、身体の硬直や年齢退行による絵画法(写真)などの深催眠に至るまでの実験がおこなわれる（cf. ⑤）。



小学校四年生の学級日誌を描く（年齢退行）



描かれた絵は実物とほとんど同じ（記憶の再生）

第2章 自律訓練法 Autogene Training

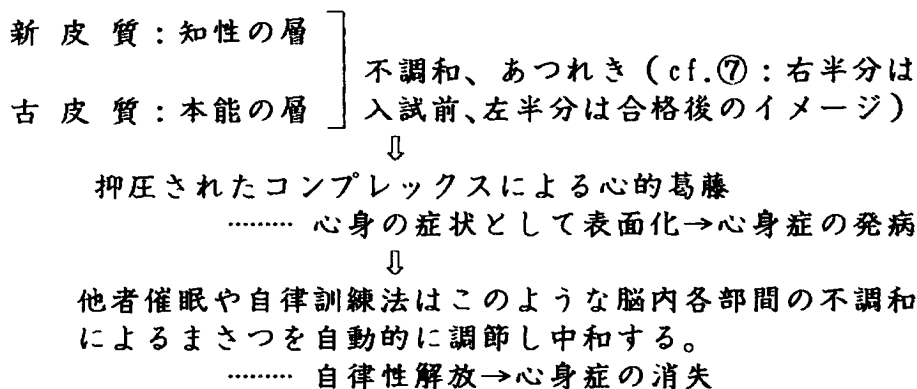
§ 1. 他者催眠から公式化された自己催眠へ

脳には心と身体の両面に生じた、様々のひずみを自動的に調整する

作用がある。ところが人間は、ストレスなどによって脳のそのような働きを十分に発動できないこともあるので、心身のひずみが次第にひどくなる。そこで脳の働きを促し、脳のもつ心身両面にわたる自律的な浄化作用、中和作用（好ましくないひずみを中和して正常にかえす作用）をうまく発現させる条件、つまり人間が本来もっている自然治癒力や自己実現の可能性が一番発揮されやすい条件を作ることが大切になる。他者催眠でも、もちろんこのような条件をつくることは可能であるが、依存性をより少なくするために公式化された自己催眠として工夫されたのが「自律訓練法」である。

§ 2. 他者・自己催眠による治療のメカニズム

人間の潜在力や可能性をのばしたり、神経症に応用される「催眠法」による治療のメカニズムは、抑圧されたコンプレックスを解放することにある（cf.⑥）。



原理的には他者催眠も自己催眠も同じものであるが、前者の速効性を利用し催眠中に自己催眠を体験すると、覚醒後、自律訓練法に安定した移行が容易である。

§ 3. 自律訓練法の基本公式

- | | |
|-----------------|---------------------|
| 1. 背景公式 | ：「気持ち落ち着いている」 |
| 2. 第一公式（重感練習） | ：「両腕両足が重たい」 |
| 3. 第二公式（温感練習） | ：「両腕両足が温かい」 |
| 4. 第三公式（心臓調節練習） | ：「心臓が静かに規則正しく打っている」 |
| 5. 第四公式（呼吸調節） | ：「楽に呼吸している」、「呼吸が楽だ」 |
| 6. 第五公式（腹部温感練習） | ：「おなかが（太陽神経叢）が温かい」 |

かい」、「胃のあたりが温かい」
 7. 第六公式（額部涼感練習）：「額がこころよく涼しい」

◎授業中には、シュヴリウルの振子と公式1.～3.までを実習する。

§ 4. 適用

(1) 病気の治療

不安、緊張などを主な症状とする神経症、気管支喘息、高血圧、偏頭痛、胃十二指腸潰瘍、筋痛症等。

(2) 心理治療

社会的不適応、緊張・赤面症、吃音、夜尿症、カウンセリング等。

(3) 教育、自己開発

教育催眠、自己の可能性の開発、精神の安定、感性の覚醒、宗教心の高揚等。

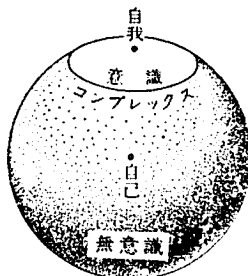
§ 5. まとめ

自律訓練法や催眠を通じて、心身のムダな緊張を解消し、人間性の喪失、自己疎外感などから我々を守ってくれる真に人間的なもの、宗教的な高みにまで導かれる。つまり、「言葉によって乱れた心を癒し」精神的なもの、内なる声に静かに心の波長を合わせて、我々は自らの潜在能力を引き出し全人格的成熟が可能となろう。

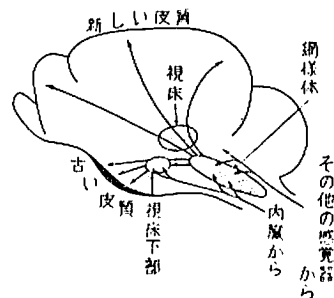
<資料>



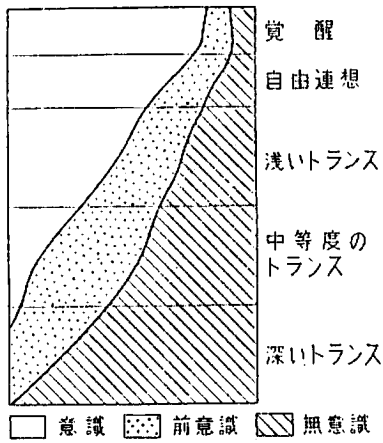
① 動物催眠の一例



② 自我と自己

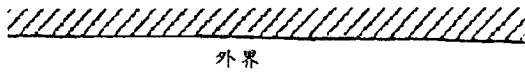


③ 網様体に暗示を与える

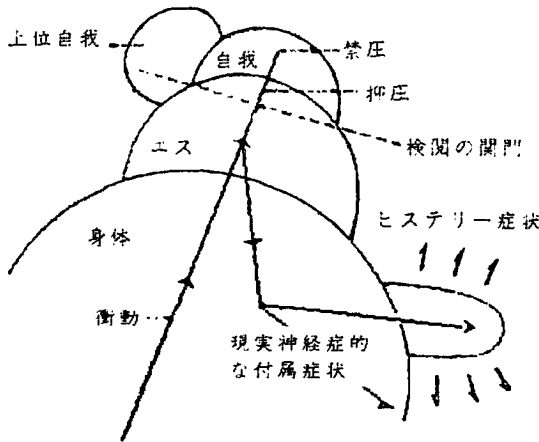


④ トランス下での意識の内容

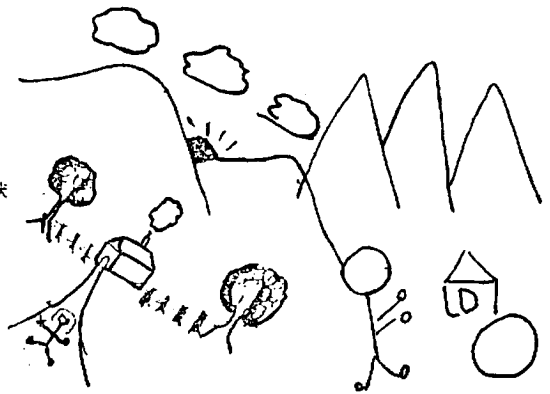
深さ	催眠深度	催眠尺度による表示	催眠現象	
浅	覚醒・正常	安静	心の安静感 心身の軽い弛緩感 半眼	
	浅催眠	覚醒暗示	前性例 まばたき、閉眼、 閉目下、指子暗示 指移動、色彩対比 手の浮遊、手足の重い感じ 手の移動、脱気、全身が弛緩して、だるい感じ	
	軽催眠	運動催眠	閉目脱気、 脱不動 指締め 閉眼直 解凍直 その他の運動不能と弛緩	空想・想像活動がやや盛ん いくらかの身離感 かなりの倦怠感 味気、熱感などが速くなる ラポールが強くなる
	中等度催眠	知覚催眠	嗅覚、味覚の異常(幻味、幻嗅) 結実の異常(幻結) 手袋状麻痺、無痛 各種の幻覚 幻聴 閉鎖したときの幻聴	イメージが活発 覚醒後にトランス感 手足のカタレプシー-緊着 情緒変化
	深催眠	人格催眠	事物名称の忘却 日時・年令の忘却 姓名忘却 人格交替 人格移動 年令逆行 夢中逆行的行動 催眠から覚めずに眼が開けられる 種々の幻覚 眼を開けて動作 負の各型幻覚 後催眠脱忘 微妙な後催眠性幻覚	心身機能の暗示による変化 失われた記憶の回復 明瞭な幻覚 覚醒後に深いトランス感 自覚性後催眠脱忘 後催眠暗示逆行(暗示下に)
深	夢遊催眠			



⑤ 催眠の深さと面接技法



⑥ 治療のメカニズム



⑦ 右の図は入試直前、左は合格後のイメージ

《講義「イメージ・トレーニング」の感想》

◎山月 美智子

「言葉は魂のメスである。

医者はメスを手に、高き精神は言葉をメスにして心を癒す。

傷を負ったものこそ、癒す力がある。」

この先生の言葉に、かなりじんとくるものがありました。もしこの2回の講義で、最後にこれらの言葉がなければ、催眠法について、いろいろ考えさせられるものはあっても、こんなに涙が出るほど感動することはなかつただろうと思います。

今までの自分のことを思い出してみても、友達にいろんなことを相談したり、手紙をもらったりして、どんなになぐさめられたことだろう。そのようなことを思いながら、この言葉を聞いていると、実感としてその言葉のもつ意味が心に迫ってきたように思います。

◎細村 真咲

今の世の中には、心の病や体の病をもつ多くの人々がいて、その治療は、年々、困難なものとなってきた。それらを見ると、心の病に限らず、体の病にも、精神力で直せるものも多くあるように思える。人間は強い生き物であるが、それと同時に弱い生き物でもある。現代の社会や学校に息づまっている人も多い。

心と体が一体化している病を直すのは、普通の状態では大変むずかしいことである。催眠者と被験者との間に深い信頼と信用がなければ、治療は無理であり、また、最悪の場合、その信頼と信用を同時に失うことになるかもしれない。だから、現代におけるいびつな人間関係を修正して、心身の無駄な緊張を解消し、人間性の喪失、自己疎外感などから守ってくれることを可能とする催眠法は、人間にとってとても有効なものだと思う。

◎本間 千夏

どちらかという現実的な考え方をする私には、あまり催眠というものに興味をもっていませんでしたし、半信半疑だったのですが、講義を受けてかなり考え方が変わりました。むしろ誤解していたようにも思えます。

催眠というものは何かあいまいなもののようなイメージがあったのですが、ちゃんと裏づけされ、医学的にきちんとした催眠法という治療法であるを知って正直いって驚きました。私と同じように誤解をしている人も多いのではないかと思います。そして、そういう人達にオカルト的な意味で催眠をとらえてほしくないと思いました。

◎光富 左都子

初めて催眠法というものを学ぶ機会が得られて大変よかったです。ビデオでの実験は、すごいなあという気持ちと共に、確かに“怖い”という気持ちもありました。だけど人間には誰だって二面性があるものだと思っていましたので、催眠法によって二面性のうち普段表れない方の面を引き出すことができるなら興味深いものだと思います。

自律訓練法での五円玉の実験では、本当に手を触れずに動いたのには驚きました。私は教卓のところに出て行ってみんなの前で実演をしたうちの一人でしたが、やっぱり人に見せるのではなく、一人でじっくり行う方がよく動くという気がしました。

あとで、手で糸をもって念じるのではなく、固定しておいて今度は手をまったく使わずに五円玉にむかって念じてみましたが動きませんでした。やはり動くと言念することによって、無意識のうちに手が動いているのではないかと思います。とてもよい勉強になったと思います。

◎原田 端穂

催眠法の授業を二時間うけてみて、最初にうけた時よりもずいぶん印象が変わりました。はじめはすごいものだと思う反面、ずいぶんこわいもので、あまり私達の生活には縁のないもののような感じを受けましたが、二時間目の方で治療法としてすばらしいものであるということがわかって、こわさとかいったものをあまり感じなくなりました。ただ本当に興味本意で催眠にかけたら、その人の意識を思い通りにすることができそうで、それが恐ろしいことだと思います。でも使い方さえ間違えなければ、本当にすごい治療法だなあと感じました。

それと二度目の講義で自律訓練の前にシュヴリウルの振子をやってみて、五円玉が自由に動くのを確認して本当にびっくりしました。以前に、「手があたたかくなる」「足があたたかくなる」というのを寝る前にやるように言われたことがあったのですが、これが自律訓練法だとわかりました。集中力をつけるための訓練法としてこれからもやっていきたいと思います。

◎中谷 まや

催眠法というものが古代から存在し、あらゆる目的で現代に至るまで使われてきたことは本当におどろくべきことでした。催眠法の最初の講義で使われたビデオには、正直言って「すごいなー」とは思いながらも内心少し信じていない箇所もありました。しかし二回目の授業で本当に信じられないという次元の問題をはるかに超え、これが現実であるということが目にやきつけられました。

ビデオの中で一番印象に残っているのは、女の人が小学生時代に戻るよう催眠にかけられ、黒板にその頃書いた絵とほとんど同じものを書いたことです。こういうことができるなら、これは記憶喪失になった人や迷子になった子供たちに多いに活用できるのではないかと

単純に考えてしまいました。男の人が禁煙できるようにした催眠も同様だと思えます。

私は最近まで催眠法というものを全く勘ちがいでいました。この数回の講義によって催眠法に対する考え方が全くかわりました。催眠をもっと身体治療や精神治療に役立ててほしいと思えます。

◎西 玲子

本当に大変興味深い講義でした。今までは、催眠法がこれほど幅広く、医学的、教育的、心理的な治療に使われていることは知りませんでした。

ビデオで見た様な催眠法を、以前に「現代の心理学を追う」というテレビの報道番組で見ましたが、あまりにもすごすぎてなんだか信じられませんでした。けれど実際に催眠法の経験をもつ先生のお話を聞き、生のビデオをまのあたりにした時は、ただただ驚くばかりでした。実体験にもとづいた先生のお話に、みんながひきこまれた様な感じて、講義自体が催眠法を体験したようでした。これから先、催眠現象を目にすることがあっても、以前とは違う観点で見られるだろうと思えます。

◎西川 智美

催眠というと、すぐ頭に浮かぶのは他者催眠のことでしたが、他に自己催眠というものがあり、それは実際私達が知らず知らずのうちに経験しているのだという事に気付きました。よく「病は気から」といわれますが、それは自己暗示のマイナスの面だと思えます。五円玉の実験からも分かるように頭の中だけで考えているはずだと思えることが、よく体にも影響してきます。自己催眠によって、自分をよい方向にもっていけるのは、素晴らしいことだと思えました。自分の内にある力を引き出すことが出来れば、自分に自信もつくでしょうし、自信がつけば新しいことを求めて何かを始めることが出来ます。自分でも知らなかったことを引き出せるのは本当にすごい事だと思えました。

催眠は自分の本当の姿を見るための手助けとなるものではないでしょうか。そして自分の力をいかに使うかということは、自分にかかっているのだから、自己催眠によって人格成熟を目指さなければならないと思えました。

◎野間 裕子

催眠法の最初の授業で、谷口先生が「この講義はある程度の知識をもった人たちに対して行うべき講義で、私とあなたたちとの信頼関係を必要とします」とおっしゃいました。そして、この広い教室で、催眠法の講義が始まった時の緊張感というか、先生の声が、直接自分の

耳にしみ込んでくるように感じるピンとはりつめた雰囲気、ぞくぞくしてしまいました。

私は講義の中で、身体的・精神的治療や、潜在的能力の開発という内容に、特に関心をもったのですが、このようなことには医学的な知識なども必要とされます。

けれども、先生の

「言葉は魂のメスである。

医者はメスを手に、高き精神は言葉をメスにして心を癒す。

傷を負ったものこそ、癒す力がある。」

という言葉聞いて、今では、専門的な方法でなくても、私自身の言葉で日常の生活において他の人に、なにか安心できるものを感じさせることができたらと思いました。

一般教養「哲学」の講義の一コマ

～星野富広「かぎりなくやさしい日々のために」
(VTR)の感想～

氏名：加藤 由記子（甲南大学 文学部）

人間というのは本来とても弱いものだろう。私も、いつも他の人を妬んだり、羨ましがったり、落ち込んだりを繰り返して生きている。強い人間というのは、本来の自分の弱さをどれだけ乗り越えていけるかで決まると思う。星野さんは自分のことを「いつもろくでもないことを考えている、弱い人間だ。」と何度も言っておられた。もちろん星野さんにも弱さがあるのだろう。人を妬んだり、落ち込んだりもするのだろう。でも星野さんの素晴らしいところは、落ち込んだまま、いじけてしまったり、あきらめてしまったりするのではなく、その時点で自分の弱さをしっかりと認め、そしてそれを乗り越えて自分が今出来ることを精一杯やっていることだと思う。

氏名：八十島 育子（甲南大学 経済学部）

人間は、一度深く落ち込んでしまうと、なかなか一人では上がってこられないと思います。そういう時に、周りの人間が手を差しのべてあげないと、もっともっと深く落ちてしまい、もう二度と上がってこられないと思います。しかし「では、あなたも星野さんの奥さんのように手を差しのべることができますか？」と問われれば、おそらく私は黙ってしまうでしょう。

いつも思うことですが、本当に自分がその立場に立ってみないと、本当の苦しみなんて、分からないと思います。しかし、私は分かろうと努力してみたいと思います。

氏名：葉山 淳（甲南大学 経済学部）

今現在、僕は健康です。動くことに積極的で、やろうと思えばできないことは無いように感じているわけです。そして実際にやりたいことはまずできる状態なのです。でも、何をやったのかというと、つまらないことしかやっておらず、本当にやらなくてはならないことに対しては、忙しいとか、体の調子が悪いなどと様々な理由を付けてやっていないのです。星野さんは、そうではないのです。できない状態の中にあって何かやる（できるようにする）というのはすごいことだと思います。人の為何かやりたい、何か伝えたいというのはみんなが持っている気持ちだと思います。そして、それは簡単にできる事である場合が多いのにやらずにいるのです。どうしてそうなのか、よくわかりませんが。星野さんを見ていると何かしなければならぬ、そんな気持ちになります。

氏名：山崎 英彦（甲南大学 経済学部）

体の自由を奪われた星野さんにとって、我々以上に目、口、耳はかけがえのない大切な器官のはずである。星野さんの目に映るものは、他の人以上に大きな意味を持っていると思う。我々なら無意味に終わってしまうことが、彼の目にはメッセージとなって見えていると僕は考えている。そのメッセージを受け止め、言葉にし、絵にする。そして、それを伝えてくれる星野さんの生き方に人の本来の在り方を見たように思う。毎日を当たり前で過ごし、感謝の気持ちを思い出させてくれる星野さんの命の輝きをいつまでも忘れないでおこうと思う。

氏名：島津 一樹（甲南大学 理学部）

人間には優しい心と、醜い心が存在すると思う。生を受けてからは、その二つの葛藤に悩まされて生きていくような気がする。又、それは必然的なことのようにも思える。人は、完全なる生き物ではない。だから、多くの人間が互いをそれぞれ支えあって生きていかねばならない。星野さん自身も多くの人々の支えがあったからこそ今に至っていると思う。人は、他人の力なしでは生きていけない。だからこそ、他人に感謝しながら自分も他人へ力添えするのだというような事が少しばかり分かりかけてきたような気がする。

氏名：木戸 英貴（甲南大学 理学部）

人が生きていく上で、どのように生きていくかはその人の心の持ち方でいかようにもなることが改めて分かった。

自分の体が動かないという絶対の事実は、それまで自由自在に体を動かしていた星野さんにとって苦痛であったであろう。絶対の事実を引き受けいわば悟りの境地に至るまでに色々な事があったにせよ、動かない肢体に固着し「苦痛」に明け暮れるのではなく、動かせるところを動かし、できることをやろうと、自分の生に能動的になられた。星野さんの自然に遊ぶ姿勢や詩に表れる心は、まるで野原に横たわって目の前にある野花を見たときのような気がする。

氏名：枝松 薫（甲南病院看護専門学校）

星野さんは汚さ、弱さを知ったから綺麗なものや強さを知り得たのだらうと思う。星野さんから「苦しさから逃げていては、楽しさ、喜びを知ることができない」ことを改めて感じさせてもらったように思う。そして、星野さん自身の精神力の強さ、優しさはもちろんのこと、彼の周囲のお母さん、奥さん、弟さん夫婦、神父さん、鈴をプレゼントしてくれた方々をはじめとする全ての方たちがおられてこそ、星野さんの心の素晴らしさが生まれ出たのだと思った。

氏名：森 厚子（甲南病院看護専門学校）

体が丈夫で、仕事をバリバリとこなす人が人間的に優れているかといえば、必ずしもそのようには言いきれないなど感じました。星野さんの様に、自分自身について悩んで悩んで、今の自分があるということに気付くことが人間としての成長になると思いました。

人間はいやなことは避けて通りたいものですが、それでは前進することができないし、自分に負けてしまうこととなります。星野さんはこのことを凸凹の道で鈴が鳴ったことで悟られました。私も星野さんのような物事のとらえ方ができたらいいなと思います。最後に、生き生きとした星野さんを見て、私達は日頃せっかちになり過ぎていて、人間として生きるということを忘れてるように思いました。

氏名：尾崎 千佐子（回生看護学院）

今回私がこのビデオを見て思ったことは、人間の内面の美しさはどこから表現されてくるのだろうかということでした。

人が絶望のどん底から、はい上がってきた時、そのパワーは人を内面から輝かせる相乗作用があるのではないかということに気付きました。人は普段何げなく日常を送り、時間に流され、感情を押し殺していると言っても過言ではありません。星野さんは、その様な日常の中から私たちの気付かない“美しさ”をたくさん発見されています。私は、とてもうらやましく思います。

氏名：真鍋 美智子（回生看護学院）

星野さんの詩や話は、他の有名な人の詩などの「こんな考え方もできるんだ」というのと違って、どれも共感できるものです。そして、それらが全て素直でわかりやすい文章（言葉）に表されていることが、この人の素晴らしさであり強さだと感じました。

ビデオを見て、星野さんを取り巻く人々の協力と愛情は計りしれないものであり、又それを彼自身、とてもよく分かっておられると思いました。私がもし星野さんようになったらと考えると、彼のように前向きに生きていけるだろうかと不安です。それにそうなった時の周りの人の対応のことも気になります。これはやはり自分のことしか考えていないな、と自己嫌悪になりますが、それでもできるだけ「感謝の気持ちと思いやり」を常に持っている人になりたいと思っています。

本年度の谷ロゼミ卒業旅行は、例年より短期間の一泊旅行を3月8日、9日の日程で行いました。予想を大幅に下回り、谷ロ先生を含めて8人という少ない参加者のため、行程、日数ともに削ることになりました。そして、周遊目的地は山陰、城崎方面に設定し、交通手段としてはA氏とE君に車を出して貰うこととなりました。

旅行前日の夜、T君の友人宅に男性参加者5人が集合、泊めてもらいました。

旅行当日の8日、外には前夜の雪が降り積もっており、皆驚き且つ車で行動する上での若干の不安を感じつつ出発。長岡天神でAさん、Kさんの女性参加者、そして亀岡で谷ロ文章先生と合流して私達の卒業旅行が始まりました。

雪が白く化粧した峠を、時にはおずおずと、いくつか越えて、目的地の一つである出石に着いたのは昼を少しまわった頃でした。昼食は当地の名物の皿そば。色が濃くコシの強いそばが一口分盛られた皿を、皆その胃袋に応じて重ねてゆく一風変わった昼食模様が展開しましたが、その時既に、夕食の事を考えてセーブしていたセコイ人も居たようです。

昼食を終え、重い腹を抱えつつ辰鼓楼をバックに記念写真を撮ったり、土産物を漁ったりし終えると再び車中の人に。空も晴れてきて気分よく車は進み!? 予定よりもかなり早く、目的の香住の街と日本海が見えてきたのは、まだ日の高い内でした。A氏の友人の実家である民宿「かどや」は畳と木の香りが心地良い和風の二階建てであり、のんびりするのに最適な宿でした。チェックインを済ませると皆、早速風呂に入り身支度を整えてしばらくすると、今回の旅行のメインである蟹料理の夕食が始まりました。さすがに産地に近いのと、おそらく仕入れ先もしっかりしているためか、焼き、鍋ともに絶品の一言で、しばしば我を忘れて蟹の身を穿っていました。昼のそばをもっと押さえておけば良かったと思ったのは私一人では無かったです。結局三時間以上にわたる蟹との格闘にもかかわらず、全てをその時点で食べ尽くすことは出来なくて残りを宿泊部屋に持ち込むことになりました。さて、夕食時から私達の間を盛り上げた一番の功労者は、ゼミ以外から特別参加の明るく可憐気なダンスを披露してくれたKさんでした、お疲れ様。その後はやがて皆アルコールに加速されて若干危ない世界に突入しつつ夜は更けていきました(どの様なものであったかは筆舌に尽くし難いのですが、ともあれE君とA君は御苦勞様でした)。

普段においては幾夜分に匹敵するか知れぬ程の色々な事があった夜を越え、一晚を費やしてT君達がつくった蟹の殻の山を後に残して、宿をチェックアウト。海岸線を東へと、白波が立つ紺碧の日本海を眺

めつつしばらく走ると、派手な外観の日和山遊園が見えてきました。園内ではイルカや海馬などのショーが行われており、イルカのハイジャンプやアシカのバスケットボール、そして何の芸も無くヨチヨチ歩きで姿を見せただけのペンギン達のおかげで、皆楽しい一時を過ごすことが出来ました。

その後、温泉の街城崎で昼風呂を浴び、ここでまた土産物を漁り、一服するといよいよ南への帰路につくことになります。さすがに皆疲れているらしく、E君運転の車では同乗者が皆眠ってしまっており、哀れなE君の姿には正直に言って笑えました。

日も既に沈み、福知山で夕食を済ませると、この旅も閉幕です。谷口先生が皆にそれぞれ言葉を掛けて、今回の旅行に関して総括されて解散の運びとなりました。

毎回に通じることではあるのですが、やはり無事故で終えることが出来て良かったと思います。例年より日程の短い今回の旅行も結果的には正解だったのでしょうか。運営に尽力してくれたA氏にE君、そして「かどや」の方々、ありがとうございました。最後となりましたが、学生生活の様々な場面において快く御指導して頂いた谷口先生には、改めてこの場を借りて卒業生一同、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。



出石『よしむら』の前

『よしむら』で皿そばを食べる





旅館『かどや』にて



『かどや』にて蟹づく
しの図



日本海をバックに



日和山遊園にて

V

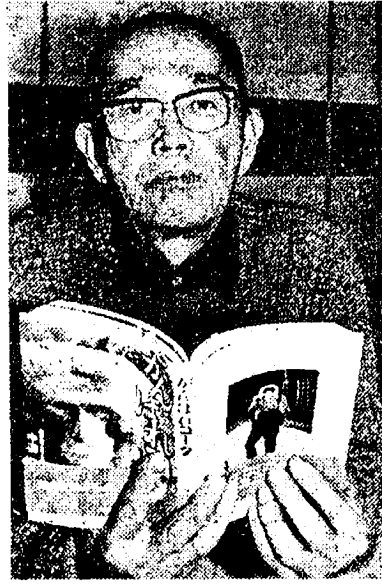
環境問題を訴え続けて

重度障害のサルの記録

自ら病と闘いまとめた

淡路島モンキーセンター所長

共に暮らした20年 支援者が口述筆記



重度障害をもつサルとの生活記録を出版した中橋実さん
＝淡路島モンキーセンターで

兵庫県洲本市畑田、淡路島モンキーセンター所長の中橋実さんが、重度障害を持って生まれた二ホンサルたちの生活記録をまとめた「がんばれコータニホンサルと生きた一〇〇〇〇回」を出版した。サルの先天的な重度障害はえさの残留農薬ではないかと疑問を投げかけ、「サル社会が人間社会に警告している」との訴えは、全国各地で共感を呼んでいる。せき触きよろまけで手術を重ね気絶になった勝ちの中橋さんが、支援ソ

なつてからの心の痛みなどが語られている。

モンキーセンターには現在約百五十四のサルがいる。うち障害があるサルは、四肢のない最重度のコータ(オス九歳)をはじめ三十四。記録を取り出しからの二十年間に四百四十四匹が生まれ、うち八十六匹が障害を持ち、この中の約五十七匹は短期間に死んでいる。

中橋さんは輸入穀物をえさとして与えたことをサルたちにわびる思いを込めて、自然に思づく命の尊さを訴え続けている。

B6判、二百三十七頁、千五百四十五円。全国の書店には一月中旬に配本。問い合わせは淡路島モンキーセンター(〇七九九二一九一〇二二)へ。

中橋所長と遊ぶコータ
＝昭和63年7月13日



兵庫県洲本市畑田、淡路島モンキーセンター(中橋実所長)で生まれた、両手足のほとんどない重度の奇形サル「コータ」が一月三十一日夜、死んだ。九年六カ月余りの生涯で、人間でいえば二十七、八歳。

コータは昭和五十五年七月十三日に誕生したオスサルで、生まれた時から両手足がほとんどなく、背骨はS字状にねじれていた。母サルにも見放されてひん死の状態だったがところを中橋所長が見つけたところを中橋所長のよう

奇形サル、コータ死ぬ

農薬の犠牲、9年半の生涯

淡路島

(毎日新聞 1990年 2月 2日より転載)

愛の家

1990



当たり前の大切さ



梁 瀬 義 亮

「1、2、3、4……と整数があること」は小学校一年生でも知っている当たり前のことです。けれどこれが数学というすばらしい学問の基礎で、若し人間の頭脳から整数が消えたとあの数学という膨大な学問が崩壊してしまいます。然かも「何故整数があるか」ということはどの偉大な数学者も証明出来ないのです。

ノーベル賞をいただく様な研究がなくても人間社会に別に大きな不幸は起こりませんが、誰でも当たり前と思っているようなことが忘れられると社会が崩壊してしまうような大変なことが起こります。例えば太陽、空気、雨、大地等々、大自然（お天道様）のお蔭で人間が生きているという当たり前のことを忘れた為に、その他のいろいろのすばらしい智慧も知識もすべて地球破壊、人類滅亡の原因になってしまつて今や人類の生存の危機が来しました。又植物は「土に生えた生き物」であり、「土から出たもの土になつて土に帰る」という至極当たり前のことを忘れて、植物を土から引き抜いて枯らして（生きものでなくして）焼いて灰にして、更にその灰を分析してそれで植物の生体の内容が分かつたとはかりに化学肥料と農薬を中心にした近代農法を考え出し、大地の生命を減らし、昆虫生態系を破壊して人類滅亡に繋がる大事を起こしつつあります。或いは人間は生命があります。

丈夫な人（生命力の旺盛な人）は病気になるという至極当たり前のことを忘れて只管屍体の分析ばかりを推し進めて難しく複雑な医学をつくり出し、日本だけでも一年に二〇兆円の巨費を使って医療を施し乍ら病氣と病人は増える一方で、医学はもう行き詰まりという有様です。人間がいち／＼証明出来ない大切な「当たり前のこと」が沢山あります。否むしろ人間社会を支えているのは人間の智慧で証明出来ない当たり前のことが殆どなのです。その当たり前のことを忘れると大変なことが起こります。上述の整数の例を思い出して下さい。

お天道様（大自然）を拝むとか、他の人々や他の生き物に親切にするとか、親を大切にすること等々、これ等は理屈以前の当たり前のことで人間社会の基礎です。

人間の智慧の空しい錯覚的驕りから「人間を越えた愛と叡智と能力の实在」に対する信と畏敬や、人間相互の愛と信頼と信頼に値する信義という当たり前のことを軽視した社会は、資本主義でも社会主義でも滅亡以外にないことを今事実がはつきり教えています。

古今の聖者の教えを今一度謙虚にきき、味わい実行すべきときが来ていると思うのです。

筆者・医師

〒637 奈良県五條市岡口二ノ三ノ四七

（愛の家 1990年 6月号より転載）

VI

修士論文・卒業論文・研究生論文・
ゼミ論文

修士論文

Development of the Tagging Counter for Heavy Ions

甲南大学大学院自然科学研究科物理学専攻 岩田哲郎

Abstract

Recently, a variety of heavy ion beams have been applied for studies of nuclear physics. Furthermore, experiments with unstable nuclear beams have just began¹⁾. Since unstable nuclei have some different properties²⁾ from stable ones concerning spins, isospins or nuclear radii etc., experiments with unstable nuclear beams are of great interest in the study of nuclear structures and nucleus-nucleus interactions.

Unfortunately, there are two difficulties for using unstable nuclear beams. Firstly, unstable nuclear beams are produced in a production target by a bombardment of stable nuclear beams from an accelerator and are focused again onto the second target for experiments. Due to an energy straggling and a reaction kinematics, a practical energy resolution in the measurement is considerably worse compare to one obtained using the stable nuclear beams. Secondary, an in-

tensity of unstable nuclear beams is much lower ($\sim 10^{-6}$) than that of stable ones. Therefore, experiments of unstable beams should be specially designed to improve both an energy resolution and a detection efficiency.

Our research group has carried out experiments with unstable nuclear beams of the ${}^7\text{Be}$ ($T_{1/2}=53\text{d}$) at the Research Center for Nuclear Physics (RCNP), Osaka University³⁾. In these experiments a magnetic spectrograph⁴⁾ "DUMAS" is used to focus the ${}^7\text{Be}$ beams produced at the first target onto the second target. There is a momentum dispersive focal plane at the mid point in the DUMAS. Produced particles, ${}^7\text{Be}$ are distributed at this plane according to each momentum. Inserting a position sensitive detector ("Tagging Counter") along this focal plane we can measure simultaneously incident energies of secondary particles as well as energies of scattered particles at the second target in every events. Getting for these two quantities we can carry out experiments with a good energy resolution. Furthermore, we can perform experiments at many different incident energies at the same time. This results an improvement of an efficiency of the measurement.

So far, multiwire or singlewire proportional chambers have widely been used for a ray tracing in the spectrograph in the light ions reaction (p,d,etc.)⁵⁾. These counters

should have two windows ($\geq 4\text{mg/cm}^2$) to fill gas and a gas pressure of ≥ 0.5 atm. is necessary to obtain a sufficient factor of a gas multiplication. A total thickness of these counters exceeds at least 5mg/cm^2 . For heavy ions this amount of thickness is too large and a resulting energy straggling (Landau fluctuation) is estimated to be larger than 540 keV at the incident energy of 150 MeV of ${}^7\text{Be}$. With such a large energy straggling a beam spot size can not tune to a sufficiently small size, typically $\sim 2\text{ mm} \times 2\text{ mm}$ at the second target.

In the present work we developed a new type of the tagging counter. Since an energy loss of the beams in this counter was designed to be very small this counter was well suited for heavy ion experiments. The basic principle of this counter was the detection of secondary electrons ejected from an interaction of the beams with a very thin foil. These electrons were accelerated, then deflected by 90° with an electric field onto an electron detector of a microchannel plate (MCP). The presence of this counter arose a negligible perturbation to the beam optics. We examined this counter with α -particles from ${}^{241}\text{Am}$ source and with ${}^7\text{Be}$ ions beam of 150 MeV in the spectrograph.

We have developed a tagging counter for an orbit tracing of heavy ions in the magnetic spectrograph at the first

time. We have designed the counter in which an energy loss of ions is very small (200 keV for ${}^7\text{Be}$ beams) and a difference of the beam orbit between with and without the counter is small enough. The emission point of the secondary electrons from a thin foil bombarded by ions is determined from the measurement with a position sensitive micro-channel plate. The counter is magnetically shielded with an iron box and even in the maximum magnetic field of the spectrograph no problem arises in the detection of the secondary electrons. We have observed the performance of the tagging counter with α -particles from the ${}^{241}\text{Am}$ source and with beams of ${}^6\text{Li}$, ${}^7\text{Li}$ and ${}^7\text{Be}$ in the spectrograph.

The detection efficiencies of this counter for α , ${}^6\text{Li}$, ${}^7\text{Li}$ and ${}^7\text{Be}$ particles are 60, 13, 23 and 20 %, respectively. The position resolution for α , ${}^6\text{Li}$ and ${}^7\text{Be}$ particles are 8.2, 5 and 10 mm, respectively. The observed time resolution for α -particles is 9.6 nsec. This time resolution is improved up to 3 nsec by changing the time constant of the charge division circuit.

It is found that the detection efficiency and the position resolution of the tagging counter strongly depend on the yield and the collection efficiency of the secondary electrons. This arises from the fact that the secondary

electrons have large spreads in an energy and in an angle. Applying a high acceleration potential for the secondary electrons the detection efficiency will reach to 100% and the position resolution will be much improved, even for ions of a small energy loss. Since the energy loss of heavier ions ($A \geq 10$) is very large, a good position resolution and the detector efficiency are expected with the present tagging counter.

References

- 1) R. C. Haight, G. J. Mathews, R. M. White, L. A. Aviles and S. E. Woodard, Nucl. Instr. and Meth. 212, (1983) 245.
- 2) I. Tanihata, H. Hamagaki, O. Hashimoto, Y. Shida, N. Yoshikawa, K. Sugimoto, O. Yamakawa, T. Kobayashi and N. Takahashi, Phys. Rev. Lett. 55, (1985) 2676.
- 3) T. Yamagata, K. Yuasa, N. Inabe, M. Nakamura, M. Tanaka, S. Nakagami, K. Katori, M. Inoue, S. Kubono, T. Itahashi, H. Ogata and Y. Sakuragi, Phys. Rev. C39, (1989) 873.
- 4) T. Noro, T. Takayama, H. Ikegami, M. Nakamura, H. Sakaguchi, H. Sakamoto, H. Ogawa, M. Yosoi, T. Ichihara, N. Isshiki, M. Ieiri, Y. Takeuchi, H. Togawa, T. Tsutsumi and S. Kobayashi, J. Phys. Soc. Japan Suppl. 55, (1986) 470.
- 5) M. Yosoi, T. Noro, M. Nakamura, H. Sakaguchi, H. Sakamoto, H. Ogawa, T. Ichihara, N. Isshiki, M. Ieiri, S. Kobayashi and H. Ikegami, RCNP Ann. Rep. (1982), p. 193.

卒業論文

心象の中の賢治

甲南大学 文学部 国文学科 四回生 榎本修一

序

宮沢賢治を文学者と見て、彼の三十七年間の人生はその人生からして未完成であると言えよう。宮沢賢治自身が、作品に於ける未完成を「永久の未完成、これ完成である」と述べているがそうであろうか。

私は生前校正が繰り返された永久の未完成である「銀河鉄道の夜」を根底に置き、その前後に重ねて創作された「春と修羅」、「セロ弾きのゴーシュ」を合わせて考察し、作品のテーマ、つまりは、宮沢賢治の人生のテーマを探ってみたい。

1. 宮沢賢治の心象の世界

わたくしといふ／仮定された有機交流電燈の／ひとつの青い照明です／(あらゆる透明な幽霊の複合体)／風景やみんなといっしょに／せはしなくせはしなく明滅しながら／いかにもたしかにともりつづける／因果交流電燈の／ひとつの青い照明です／(ひかりはたもち その電燈は失はれ)

これは「春と修羅」の序文の一筋であるが、賢治はあえて詩とは名づけず、心象スケッチと呼んだ。この心象スケッチという用語については、大正十四年二月九日付の森佐一宛書簡がある。

一前略一前に私の自費で出した「春と修羅」も、亦それからあと只今まで書き付けてあるものも、これらはみんな到底詩ではありません。私がこれから、何とかして完成したいと思っております、或る心理学的な仕事の支度に、正統な勉強の許されない間、境遇の許す限り、機会のある度毎に、いろいろな条件の下で書き取って置く、ほんの粗硬な心象スケッチでしかありません。

心象のスケッチから「作品」への関係をまとめてみると、これらは根底に生活という場を持ち、まず賢治自身の目を通し、賢治の感じた世界を現し(心象スケッチ)、さらにそれを貼り合わせ、みんなの感じられる世界(「作品」)まで汲み上げようと試みたのである。

賢治に見えたままの事実が、われわれにとっては幻聴や幻視であるということは、完成された「作品」がなかったと思うのだ。

2. 大正十四年十五年……省略

3. 修羅とデクノボー～「銀河鉄道の夜」から～

心象の世界、賢治の「生活」の岐路と探ってきて、次に「銀河鉄道の夜」を通し、さらに宮沢賢治の求めた人生のテーマに迫ってみたい。

(一) 校異におけるモチーフの変化

○ブルカニロ博士の登場

ブルカニロ博士は一次稿から三次稿最後のジョバンニが旅から帰ってくる所で登場し、次のように述べる。

「ありがとう、私は大へんいい実験をした。私はこんなしづかな場所で遠くから私の考えを人に伝える実験をしたいとさっき考えてみた。お前の云った語はみんな私の手帳にとってある。さあ帰っておやすみ。お前は夢の中で決心したとほりまっすぐ(に)進んで行くがいい。そしてこれから何でもいつでも私のところへ相談においてなさい。」

(に)……第一次稿未存

このようにブルカニロ博士が言った後、ジョバンニは金貨を二枚切符と共に渡される。博士はジョバンニにとってこの時救世者であった。さらにこのブルカニロ博士の言葉は、賢治の求めていた「作品」の完成と同調しないだろうか。「しづかな場所」とは独居自炊生活。「私の考えを人に伝える実験」とはまさに未完成の「作品」。「お前の云った語はみんな私の手帳にとってある。」とは心象のスケッチ。

心象スケッチから「作品」へと完成させたい賢治は、自ら(ジョバンニ)に語りかけることが必要であった。迷いの世界をさまよう修羅としての賢治が「デクノボー」たる存在へ離脱できない。そんな迷いの状態からの救世者が、ブルカニロ博士であり、「セロのような声」であった。

この自問自答が本文中に、自分の姿を見るという形で現れている。その姿は憐れて、ジョバンニは「思はずほうと叫」んだのだ。

最終稿に入ると、ブルカニロ博士と「セロのような声」は削られるが、自分自身の姿を見る箇所は残されたままだ。続橋達雄が、ブルカニロ博士、「セロのような声」の削除を「一種の“甘え”とでもいいうべき精神的なもろさからの脱却」と述べているが、完全な脱却に到らなかったように思える。

○たったひとつのほんたう

次に切符について、一次稿では原稿がなく二次稿はジョバンニとカンパネルラの切符は同じで、三次稿から最終稿にかけて、ジョバンニとカンパネルラの切符が別々になる。カンパネルラの切符は「小さな鼠いろの切符」になり、ジョバンニの切符だけが、「どこでも勝手にあるける通行券」となる。

それではあの「セロのような声」が言う「たったひとつのほんたうのその切符」とは何を意味するのか。

「たったひとつのほんたう」と言うと、カンパネルラの切符はどう

なるのか。その中に「うそ」という言葉が感じられる。

本文中、サウザンクロスで降りる青年、女の子とジョバンニの会話。

「あなたの神さまうその神さまよ。」

「さうじゃないよ。」

「あなたの神さまってどんな神さまですか。」青年は笑いながら云ひました。

「ぼくはほんたうはよく知りません。けれどもそんなでなしにほんたうのたった一人の神さまです。」

「ほんたうの神さまはもちろんたった一人です。」

「ああ、そんなでなしにたったひとりのほんたうの神さまです。」

賢治の考える「ほんたう」と「うそ」の定義が、この会話の中に表れているように思う。

まず、ジョバンニが、青年と女の子の信じる神を「うそ」と言ったのが初まりで、この会話が生まれる。

この会話で注目したいのが、互いに「たった一人の神さま」を論じる点で、その神さまをジョバンニは「ほんたうはよく知」らないと言ひ、他方青年たちは知っていることだ。

「ほんたうのほんたう」、「たったひとつのほんたう」の世界観は、賢治にとって「何だかわからない」世界であった。

ジョバンニが求めたかったひとつのほんたうの神さま>がいる究極的な世界がそこにあるということは、そこに青年たちの神さまも内在されているからであろう。また、ジョバンニの切符だけが「どこでも勝手にあるける通行券」なのは究極的な世界を感じているのがジョバンニだけだからだろう。

(二) ジョバンニの孤独

ジョバンニは本当に孤独だったか。少なくとも孤独の姿を背負う登場人物であったに違いない。その孤独感は賢治に「とし子の死」があるように、ジョバンニはカンパネルラの死があった。

賢治にとって「銀河鉄道の夜」とはとし子との訣別の旅であり、ジョバンニにとってはカンパネルラへの訣別の旅であった。そして賢治は独居自炊の「生活」を求め、「孤独を愛し、熱く湿った感情を嫌」った訳だが、ジョバンニはどうか。彼はカンパネルラとの訣別の旅を終えた後、母の家に帰るではないか。一次稿から最終稿にかけて、確かにジョバンニの旅はブルカニロ博士の夢から、自らの夢に変わった。それは賢治が教師生活という農民の苦しみの上にある「生活」から、その苦しみの中に自ら入ってゆく独居自炊「生活」への変化に類似するが、未だ孤独感、賢治の希求した世界観はあらかしきれなかったのではないか。

賢治の希求した世界に孤独な「デクノボー」という姿がある。農との同一化は、賢治にとって、東北農民との同一化でもあった。孤独な理想像デクノボーは農と同一化した姿であって、他者から離れるので

はなく、すべてを内在し超越した存在であった。しかしジョバンニの姿にこのテクノボー観は乏しく「銀河鉄道の夜」も「作品」としての完成はみられなかった。

4. セロ弾きのゴーシュとジョバンニ……省略

<特別実験卒研要旨>

環境生物試料中のセレンの分析

甲南大学 理学部 四回生 西村 由美
(応用化学科 分析化学研究室)

<緒言>

ヒトを含めて多くの動物の体内には、ほとんどすべての元素が存在し、その不足ないし過剰については、家畜学以外では、特殊な場合を除いてあまり関心が向けられていなかった。環境汚染の問題から、主として重金属の中毒症に対する関心は大きかったが、逆に栄養素としての元素という立場からは、あまり研究がなかった。栄養素という視点すらみれば、その不足が常に問題となり、疾病としては欠乏症が目されることになる。

本研究では、その存在量が極めて微量であるために現在までほとんど研究がみられない研究対象であるセレンについて、微量元素と生体との関係という視点から調査を試みた。セレンは、動物体内の過酸化物質代謝に関する酵素の一種グルタチオンペルオキシダーゼの反応中心を構成する必須元素であり、乳幼児の免疫力などに対する影響が目され始めている。

<実験テーマおよび結果>

人口が都市部に集中し、食糧生産の場と消費の場が隔離されてしまった今日の社会では、高度に精製された素材を用いて調整された加工食品や組み立て食品に依存しているところが大きいことに気づく。このような加工食品の場合、加工程度が高くなるほど、微量元素は加工中に流失、損耗して不足したり、夾雑によって過剰になる可能性が大きくなる。本研究では、まず一般に市販されている食塩七銘柄についてそのセレン含有量を調査した。食塩の原料となる海水中のセレン濃度は 80ng/l と報告されており、その海水が単純に濃縮されると考えると、食塩中にセレンの存在が推察されるが研究結果は、すべての食塩中のセレンの濃度が検出限界以下であった。このことは、現代における加工食品、その代表としての食塩は、その精製過程において、本来原料物質に含まれている栄養レベルでの微量元素(例えばセレン)

が、分離除去されていることを示す。このような事実は、現代の加工食品に対する栄養学的見地からの大きな警告であるといえるだろう。

次に、乳幼児の一つの栄養源としての牛乳についても、そのセレン含有量を調査した。13種類の市販牛乳中のセレン濃度は、10.3~22.4 ppbと分布しており、その濃度範囲は無脂乳固形分、乳脂肪分、殺菌条件、生産地の区別なく20ppb付近に収斂していることが分かる(表1参照)。また、一銘柄の市販牛乳を選び、約一ヶ月にわたり、そのセレン、亜鉛および銅の濃度変化を調査した。図1から明らかなように、セレン、亜鉛および銅の濃度は、製造日差に伴う顕著な変化はみられず、セレンと亜鉛が牛乳中でほぼ一定の濃度比で含まれるものと推定するにとどまる。

さらに、母乳中の必須元素含有量について述べると、初乳で極めて高いが、2週間後の含有量は著しく低下することが知られ、成長に伴う需要を満たすことができず、乳児では一般に欠乏準備状態にあるとされている。母乳中の亜鉛含有量については、すでに報告があり、初乳中に最も多く日数経過に伴って急減することが確認されている。本研究では、初乳から出産後15日目までの母乳試料について、セレン、亜鉛、銅、鉄およびマンガンの含有量を調査した。図2から明らかなように、セレンと亜鉛の濃度間の相関係数を算出すると $r=0.89$ と高い相関性が認められ、このことから亜鉛と同様にセレンは出産後の母乳中で減少ないし欠乏の傾向にあることが示される。近年、乳児の突然死症候群に対するセレン欠乏の関与が言われているが、研究結果は、その可能性を支持するものと思われる。しかし、生体内でのセレンの働きやセレンと他元素の関連性は未だ不明な点が多く、研究が急がれる。

<考察>

文頭で述べたように、人体には自然界に存在するほとんど総ての元素が含まれ、その微妙な存在バランスが生命の輝きを支えている。セレンという元素一つを採りあげても、自然には人間をも含む大きな流れがあるということに気づかされる。人体は、自然の大きな流れを写しだす内なる宇宙という名の鏡ではないだろうか。本当に大切なものは、この内なる宇宙と外なる宇宙(=自然)とを貫き通す、大きな視点ではないかと感じた。

試料	製造年月日	無脂乳固形分	乳脂肪分	殺菌	生産地	Se濃度(ppb)
雪印北海道3.6牛乳	'89.10.6	8.3%以上	3.6%以上	140℃・2θ	北海道	17.1
明治3.6牛乳	'89.10.11	8.3%以上	3.6%以上	120℃・2θ	兵庫	12.8
森永3.5牛乳	'89.10.11	8.3%以上	3.5%以上	140℃・2θ	愛知	13.2
コープ霧島3.5牛乳	'89.10.20	8.3%以上	3.5%以上	138℃・2θ	宮崎	20.1
コープジャージ4.0牛乳	'89.10.24	8.5%以上	4.0%以上	120℃・2θ	岡山	22.4
コープ1.5ローファット牛乳	'89.10.24	8.5%以上	1.5%以上	120℃・2θ	岡山	20.2
コープ3.6牛乳	'89.10.24	8.3%以上	3.6%以上	120℃・2θ	兵庫	19.1
LAWSON3.5牛乳	'89.10.29	8.3%以上	3.5%以上	130℃・2θ	広島	10.3
農協牛乳	'89.11.2	8.3%以上	3.5%以上	120℃・2θ	兵庫	18.0
雪印3.5牛乳	'89.11.5	8.3%以上	3.5%以上	120℃・2θ	兵庫	21.4
ジャージ牛乳(黒川乳業)	'89.11.11	8.7%以上	4.0%以上	65℃・30θ	大阪	20.4
3.5MILK(六甲牧場)	'89.11.12	8.3%以上	3.5%以上	120℃・2θ	兵庫	19.3
成分無調整3.5牛乳	'89.11.13	8.3%以上	3.5%以上	125℃・2θ	大阪	19.1

表1 銘柄別牛乳中のセレンの分析結果および牛乳成分との関係

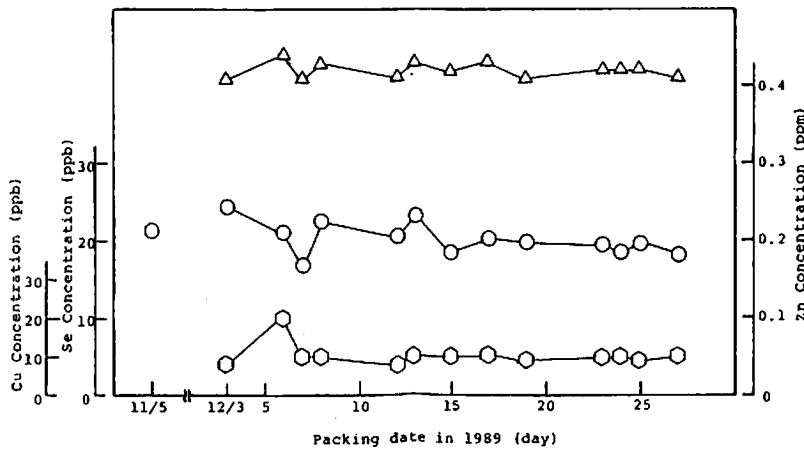


図1
製造日差による牛乳中のセレン、亜鉛および銅の経時変化

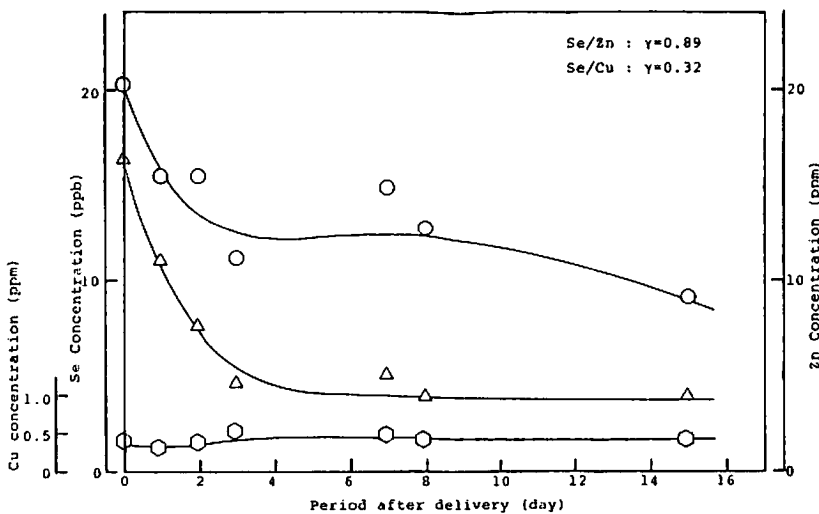


図2
母乳試料中のセレン、亜鉛および銅の経時変化

Drift Chamberによる荷電粒子飛跡の解析

実験者 甲南大学 理学部 4回生 深谷 昌生
共同実験者 甲南大学 理学部 4回生 水流 正信
(応用物理学科 山本研究室)

1. 序論

2次宇宙線の μ 粒子は、電荷を持つ故に空気中等を飛行する際に周囲の分子をイオン化してゆく。一定の電場内の一点を荷電粒子が通過した際に作り出された電子が電場の陽極点に電子なだれにより到達するまでの時間から、一点～陽極の間の距離が解る。そのことを利用して μ 粒子等の飛行軌跡を測る為の機器としてDrift Chamberが在る。

2. 目的

比例計数管(chamber)を8本と、その周辺機器(Amp. Discriminator, filter)の製作と、データ解析の為のプログラムの作成を行い、 μ 粒子の飛跡の2次元回析を行う。

3. 本論

今回製作した比例係数管は、アルミニウムの筒の内に金メッキしたタングステンをアノード(陽極)として張り、前後に CH_4 とArの混合ガスを流す為のコネクタ接続穴を開けてある。(※1): Fig-1

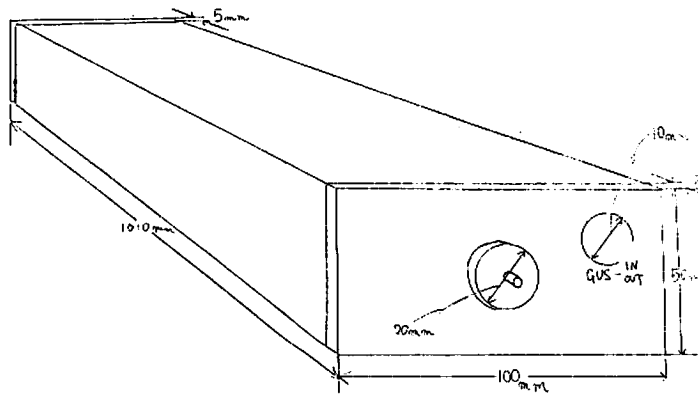
この比例係数管を、本年は8本造り、Fig-2の様にならべ、ガスを流すチューブ系で接続、アノードには電源からフィルター(※2)を介してプラグを接続、負極は管の外部にアースしてある。フィルターからは、キャッチされた電子の分変化する微小電圧を検出するコードが出ており、アンプ(※3)、ディスクリミネーター(※4)を通してTDC(※5)の8つのストップ端子に入っている: Fig-3。一方、TDCのスタートには、シンチレーションカウンター(※6)からの信号が入る様になっている。

簡単に理論を説明すると、任意のチェンバーを上下に在るシンチレーションカウンターごと貫いて μ 粒子が通ると、先づ上下のカウンターからの信号がスタート(時間 $t(0)=0$)としてシステムに入り(μ 粒子の速度は、電子のドリフトのものより十分に早く、上下のカウンターで検出される同一粒子の信号の時間差は極めて小さい為は無視してある。)、 μ 粒子の通過したチェンバーの、通過軌跡から陽極まで電子がドリフトした距離に応じて遅れて検出された信号がストップ(時間 $t(i)=x(i)$: $i=1\sim 8$, $0\leq x < \text{MAX}(\text{count})$)…粒子の通っていないチェンバーからは、信号が入らず、カウントはMAXを越えて無視される。)に入り、デジタルカウントでそれぞれの時間差が出てくる、それをファイルに記録し、別に作成した解析プログラムで幾荷学的にファイルを入力してそれぞれのデータからそれぞれの軌跡を算出する。

4. 結論

結果として解析された、チェンバーと軌跡の関係を図で示してある。精度としてはミリ以下のものが得られ、期待以上のものがあつたが、システムの検出能力にはまだまだ改善の余地がある、今後はチェンバーの数も増え、軌跡の三次元解析も可能になり、システムも充実するであろう。また、プログラムもより合理的にまとめる書式があると思われ、それと共に演算能力、速度も上がり有効なものに発展すると思われる。

- ※1：有効なガス電離～ドリフトを活用する為に $Ar : CH_4 = 9 : 1$ の混合ガスを用いる。
- ※2：特定の周波数範囲にある周波数の信号のみを通過し、それ以外の信号を減衰させる四端子回路網。
- ※3：入力電力を増幅して出力するもの。
- ※4：入力電力があらかじめ設定したしきい値を超えた時のみにパルスを出す回路。
- ※5：微小時間を単位としてデジタルカウントで、スタート信号が入った時からそれぞれのストップ信号が入った時までの時間を出力するもの。
- ※6：放射線（荷電粒子や γ 線）が当たると蛍光を発する物質（シンチレーター）を用いて放射線を検出する装置。



材質：アルミニウム（厚さ2mm）
寸法：（外）1010mm×100mm×50mm
 （内）990mm×96mm×46mm
容積：4371.84cc
芯線：金メッキタングステン（φ100μm、張力400g）

Fig-1 比例係数管(チェンバー)外形

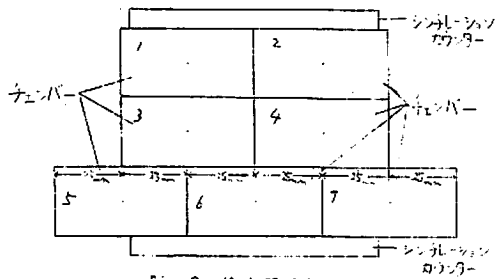


Fig-2 検出器系設置図

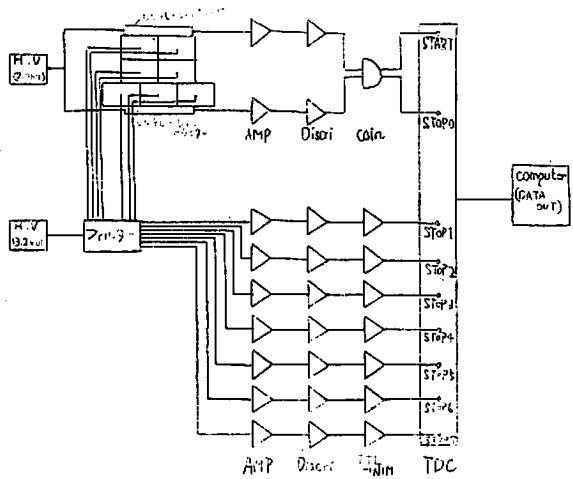
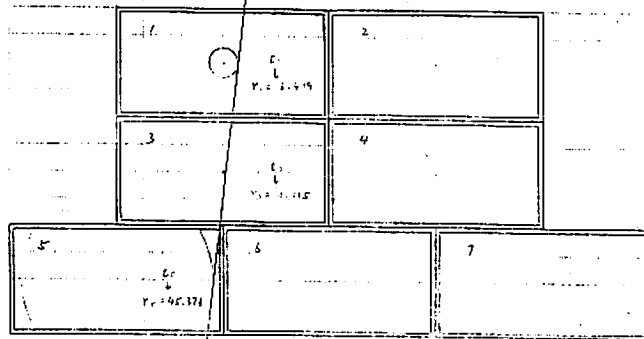


Fig-3 システム図

56

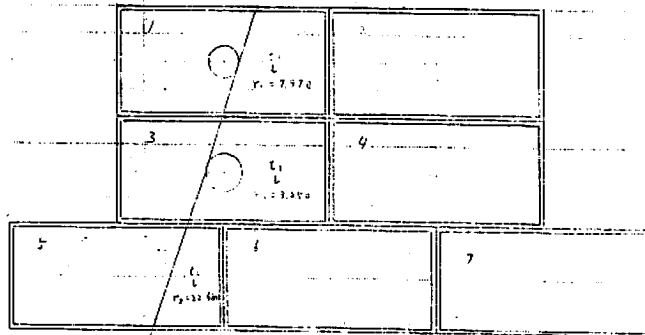
解析結果例

μ 粒子軌跡



57

μ 粒子軌跡



研究生論文

ミシェル・フーコーの流儀 ～セクシュアリテをめぐる考察～
甲南大学 文学部 研究生 田中素子

序文

なぜ、フーコー (M. Foucault, 1926-1984) か。いささか逆説的ではあるが、この問いの答えをみつけるべくフーコーの『性の歴史』を考察し、セクシュアリテを題材とする彼の問題意識—新たな思考方法への挑戦を探索したいと思う。

形而上学批判の流れは現象学、実存主義、構造主義に継承され、新しい知を模索している。フーコーは、この風潮の中で最も徹底した脱—中心化=自己からの離脱 (客観的な対象をも主体をも否定) を目指して、考古学 (アルケオロジー) という方法論を用いての知の探索、すなわち中心化された知の拡散を試みるのである。

Ⅰ フーコーの考古学

a) 「歴史」への挑戦

フーコーは、従来の歴史概念を人間のある特権的な視点 (コギト的視点) が見てはじめて成立したものに過ぎないのではないかとし、本来の歴史とは多義的でさまざまな断層が入り込み、固有の論理と複数の中心を持つのではないのかと考えるのである。それは近代以降の「歴史」への挑戦である。フーコーがとなえるものはちょうど考古学が地層のずれを確認するように、各時代、時代のエピステーメを確認していく知の考古学なのである。

b) アルケオロジーと「知」

新しい知の形態において真理とは何かを追究することは、その時代の知の全体的な編成の中で、一時代の文化・社会全体の基底にある認識志向、あるいは根底的な知という概念=エピステーメを使うことにより可能となると考えられる。「知」は、倫理化、美学化、政治化など実に多様な「敷居」との関係ではじめて存在し、「敷居」によって、問題となる地層のうえにさまざまな層、断層、方向が刻みつけられるのである。フーコーは客観的特権的認識者の位置を放棄し、<素人>の代弁者として狂気、監獄、言語などの問題の脱—中心化を行ってきたが、次に「セクシュアリテ」の問題を取り上げ、性に関する全く正反対の見方つまり過剰な発展、抑圧・制限の対象と二つの見方に疑問を持ち始めた。それはセクシュアリテがいかんにして単に人類の再生を可能にするだけのものでも、快楽や喜びを得るためだけのものでもな

く、私達の深遠な「真理」が読み取られ、語られるという特権的な場とみなされてきたか、という人間の主体性、自己形成の問題へと向けられるのである。こうしたフーコーの態度から見た「性」に対する従来と違った一つの認識を著作『性の歴史Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ』をとおして見てみることにする。

ミシェル・フーコー エピステーメー叢書 豊崎光一 訳『外の思考』
(朝日出版社 1978)

桑田禮彰 福井憲彦 山本哲士 編集『ミシェル・フーコー1926-1984
権力・知・歴史』(新評論 1984)

田村俣 ぶろばあ叢書『フーコーの世界』 (世界書院 1989)

竹田青嗣『現代思想の冒険』 (毎日新聞社1987)

Ⅱ 『性の歴史』 第一巻から第二巻への主題移行の問題

第一巻『知への意志』では、まずセクシュアリテがヴィクトリア朝では抑圧されてきた、という西欧型文明社会の通念に対する疑問が提示され、人間のセクシュアリテ(性行動)を知と権力と快楽の三極構造について方法論的に解明しようと試みられた。実際、性の言説は道徳律から医学的考察へとその出現の場を移行していったものの、人間の医学的研究=人間の真理の科学的追究の重要な資料としてより膨大な量と精緻さで語られるようになったのである。しかも性は、「告白」という自己摘発的な形式で語られ、法や禁止の問題だけでなく、真と偽の問題となり、性の真理が人間の真理の賭金となり、個人が己れの自己同一性(の意識)を確立させる媒体として考えられる。しかしながら、第二巻『快楽の活用』ではこの「知と権力と主体性」の主題系から《自己との関係》という新しい「倫理」の主題系へ移行している。セクシュアリテをめぐる「知」の形成やそれと並行する力関係としての「権力」よりも行動主体-快楽と欲望の主体の問題に力点がおかれ、研究全体を再構成することになったのである。フーコーは、いかに道徳的問題構成がなされたか、つまり人間が生きる世界を《問題構成する》諸条件は何かというものを規定しようと試みるのである。

以上のような理由により、フーコーは古典期古代にさかのぼり欲望本位の人間の系譜学へと研究の焦点をしばりこみ、問題構成の考古学と自己実践の系譜学という二つの概念の交差する位置から、自己の実践をもとにして書かれる倫理的問題構成の歴史を企てたのである。

M. Foucault 渡辺守章 訳『性の歴史Ⅰ 知への意志』(新潮社 1986)

Ⅲ 『性の歴史Ⅱ 快楽の活用』の考察

古代ギリシャ時代のセクシュアリテ倫理

ギリシャ古代における道徳的考察は、許容や禁止の厳密な規定への方向づけよりも、自己の実践と、鍛練 (askesis) の問題への方向づけがはるかに著しいとフーコーは考える。そこである道徳の規範面と鍛練面の構成要素との相違を念頭に置き、どのように自己自身の存在様式が確立され、キリスト教の規範へと姿を変えたかを検討する。

a) 快楽の道徳的問題構成

この時代のギリシャ人における快楽の道徳的問題構成の形式を性行為の道徳的配慮という視点における重要な概念であるアフロディシア、クレーシス《活用》、エンクラティア《克己》、ソロシューネ《節制、思慮》の4つを検討すると、《倫理的な実質》として認識されていたアフロディシアは、悪の対象とは考えられていなかったが生命にかかわる道徳的配慮の対象であり、そのためそのクレーシスは重要視され、能動的自由を目的とする積極的な自己統御即ち、エンクラティアを条件とするソロシューネの実践=養生術が最重要問題として構成されていたのである。また快楽を用いる際に自分を道徳主体として構成するためには、同時に自分を認識主体として構成しなければならないと考えられていた。

b) 養生術

ギリシャ人の関心は《治療本位》であるよりも《養生術本位》であった。性行動の医学的問題構成は、その行動を健康管理や身体生活とうまく統合したいという意志にもとづいて行われ、運動、食べ物、眠り、愛欲の交わりなどを、可変的条件に応じて調整する暮らしの技法としての養生生活の実践が行われ、それは健康と同時に道徳を目標とする主体としての自己を構成する一つの方策であったのである。

c) 快楽に関する養生

このような養生生活の配慮の下では性行為の形式そのものは決して問われず、個人と世界、個人の体質と風土、身体の特質と季節などの関係において考えられた。個人が保存維持すべき力と生命の再生=子孫確保というバランスの中で問題となるのである。快楽は生と死についての哲学的思索による根本的原理によって、性的活動の分別をわきまえた規定をいっそう素直に納得するよう方向づけされるのである。少なくともギリシャ時代においては、抑圧・制限といった性に関するネガティブな考えは見られなかったということ、むしろ、生存の美学を支える重要な手段としてポジティブな意味合いをもっていたという考えをフーコーは慎重に導き出し、「抑圧の仮説」の崩壊と性の真理への問題構成を証明したのである。

M. Foucault 田村俣 訳『性の歴史Ⅱ 快楽の活用』（新潮社 1986）

Ⅳ 『性の歴史Ⅲ 自己への配慮』の考察

帝政期のセクシュアリテ倫理

ここにおいてもフーコーの主題は自己実践を中心とする『倫理的問題構成の歴史』であるが、ローマ帝政期におけるセクシュアリテをめぐる倫理は自己への関係の強化＝自己の陶冶、自己への配慮の増大、男性主体の家庭管理よりも妻との相互理解関係の強調、結婚生活以外での性の戒めと若干の変容が解明される。しかしフーコーはこの帝政期における性行為に対しての厳格さを即、キリスト教社会の中での法律構成と制度的基盤となる性的厳格さとするのを慎重に避けている。性行為はずっと以前から、危険で抑圧しがたいものだと見なされ、その厳格さの原則は帝政期に初めて規定されたものではないからである。

a) 自己の陶冶

帝政期の性行動に関する倫理の微妙な変化は、以前にもまして快楽の問題の強調、快楽の活用法への関心＝アフロディシアであり、そのいっそう強烈な問題構成作業である。この道徳的省察における性的厳格さの強化は、禁止される行為を規定する規範の引き締めという形式をとるのではなく、その特徴は自己への関係の強化（能動的配慮）という形式をとっている点である。その目的は単に自分の地位だけでなく理性的存在として自由な自分自身を確立することであり、そのため《自己の陶冶》が重大課題となるのである。

b) 不安感

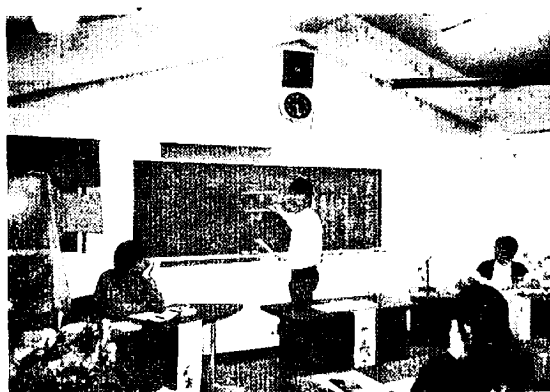
《自己の陶冶》によって、医学上の配慮は身体の悪（病氣）と心の悪（病氣）とに向けられ、過度への危惧、養生の管理に対する細かい注意など、身体をとおして心の変調をもたらしかねないすべての要素の重視へと移行し、不安感を高めるのである。セクシュアリテはその捉えがたいという性格上、問題対象化と警戒心を作動させる標的となったと考えられるが、まだ禁止や抑圧の対象ではなかったのである。M. Foucault 田村 俣 訳『性の歴史Ⅲ 自己への配慮』（新潮社 1987）

結論

フーコーのセクシュアリテについての省察は「知」と「権力」との関係に位置する性の歴史から、セクシュアリテの倫理観の歴史へと主題が変容していった。それは、彼が真理の一つの歴史を解明する企てとして人間存在の問題構成を、ギリシャ古代にまでさかのぼり、どのようにして性の活動と快楽とが、ある《生存の美学》の基準を働かせながら、自己実践をとおして問題構成されたかを分析、証明する結果になった。だが、彼がセクシュアリテに関する新たな道徳律をギリ

シャ・ローマ時代の人々の《生存の美学》に見いだし、そこに立ち戻ろうと言ってるのだと早合点してはならない。ギリシャ・ローマ時代の流儀、それは一つの思考である。フーコーの試みは歴史の脱-中心化、その全面的拡散であり、その具体的な方法が「別の仕方考えること」なのである。

序文においてなぜフーコーかと自問したが、それは客観的事実などないと考え、緻密なアルケオロジ-という作業を行うフーコーのこの姿勢、この発想、この思考にこの流儀に深く共鳴するためである。



ゼミ論

『人間の学としての倫理学』を読んで

甲南大学 文学部 四回生 天野 雅夫

1. 人間存在とは何か

我々は、社会における一人の人間として存在している。その中である時は、個人として、またある時は世人として暮らしている。ではこの人間とは、社会とは、人間存在とは一体何であろうかという疑問をいだく。そこで、①人間、②世間、③人間存在の順にこれらについて詳しく論じてみたい。

①「人間」について

人間という言葉は、元来「世間」や「世の中」を表していた。この言葉が、現在使われている意味に変化したのには、重大な意義がある。なぜならこの変化が、人間自身による人間そのものの実践的理解に基づいて無意識にはあるが、おこなわれてきたことを示しているからである。では実践的理解とはどのようなことであろうか。現在我々は「人間」という言葉と「人」という言葉を同じ意味に用いている。この「人」という言葉は、我を表すと同時に他人をも表している。「人に構うな」という場合の「人」は、我を表している。また「人のものを取る」という場合は他人を表している。さらに「人」という言葉は「人間きのわるい」の場合のように世間をも表している。このような「人」という語に「間」という語が結合した場合でもその意味は失われていない。現在この「人間」という言葉が個人を意味するのは、その個人的な面が強調されているからにすぎない。つまり本来「人間」という言葉は、自、他、世間を示す。この構造そのものが「人間」であるといえるだろう。

このように「人間」という言葉が自、他、世間を示すためには、我自身が他者にとってまた他者であり、汝にとっての他者がまたそれ自身我であるという自他不二的であることと、個人は社会において初めて個人になり、また社会は、個人なくしては成り立たないという二つの理解が必要である。このこれらの無意識的実践的理解なくしては、「人間」という言葉がこのように用いられることはない。この人間の本質的構造が「人間」という言葉をこのように変化させてきたのである。「人間」とは世の中自身であると共に、また世の中における「人」である。従って「人間」は単なる「個人」でも単なる「社会」でもなく、「人間」という言葉において、この二つは統一されているのである。ではこのような「人間」の構造を把握しつつ人間の特

徴を、まず世間性から考えてみたい。

②「世間」について

「世間」という言葉は、「世」と「間」の結合である。この「世」という語は「世代」といわれるように時間性を表している。またそれと同時に「世情」といわれるように人間の社会という意味にも用いられる。しかもその社会は「世路」というように空間的なものとしても理解されている。そしてこれらがすべて社会としての人間関係を含意している。

次に、「間」という語も人間関係を現しているが、それは空間的なものである。この「世」と「間」が結合することによって、さらに主体性という意味が生まれてくる。それは「世間がうるさい」のように、主体としての世間となる。これは世間が無機的な一つの場面でないことを示している。つまり人間の一つの側面であるといえるだろう。このように人間を「世間」として把握すると、そこには時間性としての歴史性、空間性としての風土性、といった面を明白にすることが出来る。ではこのような構造をもった人間存在とはいったいどのようなものなのだろうか。

③「人間存在」について

現在、「存在」という言葉は、“もの”をさしてそのものが「ある」ことを意味するが、これは存在の本質ではない。ただ擬人化することによって、ものを対象にあてはめているのであって、本来は人間存在を意味している。

「存」という言葉は「存じております」のようにあることを心に保持する意味に使われる。さらにその保持が自覚的であることを強調する。すなわち「存」は主体の作用、行為であって、対象的なものを保持することは、己自身の把握において可能となるものであるから、主体の行動として己自身及びものを保持する意味である。そして保持することは失うことも含むので、この行動に時間的要素が加えられる。

「存」が時間的意味を含むのに対して、「在」は「にあり」のように空間的な要素をもっている。特に「在世」「在宅」のように「にいる」という主体的空間的な意味を示している。さらにこの空間は、人間の社会的な空間つまり場所に関係している。このように「在」は人々が、それぞれの（社会的な）場所に去来しつづつあるということである。

以上のように「存」は主体の時間的、自覚的、自己把握であり、「在」は主体が実践的交渉において場所にあることである。とすれば「存在」は時間的、自覚的に場所において自己を保持することである。これが人間存在なのである。

2. まとめ

和辻哲郎は、人間存在を日常使われている言葉の分析からその構造

を明らかにした。これが「間柄」の理論である。和辻は、『人間の学としての倫理学』において人間の構造を理解するためには、第一に人間の個人的・社会的二重構造を時間的・空間的側面から明らかにし、次に個人としての人間及び社会としての人間を考察し、最後にその歴史性・風土性という特殊性を解明する必要があると述べている。ハイデッガーは人間を理解するために時間的側面を基軸に、個人性という観点から考察を進めたが、ここで人間の社会性という空間的側面を取り扱う作業が、その時間性の強烈な印象のため見えなくなっている。『風土』において和辻は、そのことについて次のように述べている。「時間性がかく主体的存在構造として活かされたとき、なぜ同時に空間性が、同じく根源的な存在構造として活かされてこないのか…中略…そこに自分はハイデッガーの仕事の限界を見たのである。」(PP.1~2)このように人間の把握が、その二重性においてなされるとき、時間性は空間性と相即したものとなり、そこから人間の歴史性・風土性がその実相を露呈する。それとともに、その歴史性が風土性と相即したものであることが明らかとなるのである。このような観点から捉えたとき人間存在の真相は明らかとなるのである。

参考文献

- ①和辻哲郎全集第八巻 『風土』 (岩波書店 1962)
- ②同上第九巻 『人間の学としての倫理学』 (岩波書店 1962)

「無意識」についての深層心理学的考察

甲南大学 法学部 四回生 辻 啓之

1. 序

「人間の行動を決定するものはなにか？」この問いは、学問の世界において、哲学、心理学のほか、法学や経済学においても重大な関心事となる。また、日常生活においても、人が自分や他人の行動の動機を考えることは決して珍しいことではない。

このような問いに対する答えにおいて、「無意識」という言葉が用いられることがしばしばある。しかし、この「無意識」という言葉は漠然としたものであり、様々な用い方をされているように思われる。そこで、「無意識」について重要な理論を述べている二人の深層心理学者、フロイトとユングそれぞれの「無意識」を考察し、その言葉の意味を少しでも明らかにしてみたい。

2. フロイトの無意識

最初に無意識という概念を発展させたのは、フロイトであった。彼

は特にヒステリー患者の治療から無意識に思い至り、その概念を夢や錯誤行為へと広げていく。彼は初期の頃、意識性の三つの質として「意識」「前意識」「無意識」という概念を考える。「意識」とは個人が今現在、認知している思考や感情等の心的内容をさし、「前意識」とは今は認知していないが注意次第で容易に意識に上がりうる心的内容、そして「無意識」とは単なる注意の及ばない心的内容をさす。

彼はその後、心的人格の構造を力動的にとらえようとし、心の三つの領域である「超自我」「自我」「エス」を設定する。この三つの領域と先の三つの質とは相互に対応するものではない。「超自我」とは両親から受け継がれるもので、「自我」を監視し、道徳的な判断によつて裁く力を持つ法廷である。「自我」は人格の意識的な主体であり、「エス」からくるリビドーを、外界を顧慮した現実原則によってコントロールする役割をもつ。「エス」は人格の欲動的な側面の極限であり、苦痛を避けひたすら快楽を求めようとする快感原則に支配されている。彼によると、「自我」は「外界」「超自我」「エス」という三人の暴君に仕え、それぞれの注文と要求を相互に調和させようとして骨を折る召使であるとされる。

このようなフロイトの説は、神経症の症状や夢や錯誤行為の原因を、個人の成育過程における原体験に求めようとしたことに基づいている。彼は人間の心的過程を科学的に分析し、因果関係によってとらえようとしたのである。

3. ユングの無意識

ユングは初めフロイトと協調して同様の路線を歩んでいたが、以下のような意見の相違からフロイトと訣別し、自らの理論を展開するようになる。彼は人間の心を「意識」「個人的無意識」「普遍的無意識」という三つの層に分けて考えた。「意識」については、内向-外向の二つの一般的態度と、思考・感情・感覚・直観の四つの心理機能をあげ、その組み合わせによってできる八つの基本類型を中心とするタイプ論を用いて説明する。「個人的無意識」とは、ある個人が自我を形成していく上で、受け入れ難いこととして抑圧したり、個人的体験のなかで記憶から抜け落ちていったりしたものの総体である。これは、原体験を重視するような点でフロイトの「無意識」と関連が深い。それに対して、無意識の深層である「普遍的無意識」は個人の経験とはかかわりなく、人類に普遍的に共通しているものであり、そこには基本的な型があると考えられ、それは「元型（アーキタイプ）」と呼ばれる。

そしてユングは、意識の中心として「自我」を考え、意識・無意識の総てを含んだ心の全体性であると同時にその中心であるものとして「自己」を考え、「自我」は意識体系を統合し、外界を認識し、判断し、対処する方法を見出してゆく働きをし、「自己」は意識と無意識の

統合機能の中心として、人間の心に存在する対立的な要素、男性的なもの、女性的なもの、思考と感情などを統合する働きをすると考えられる。

4. フロイトとユングの無意識の相違

それではここで、両者の考えをそれぞれの特徴にしたがって、幾分強調しながら対比してみる。まず、意識との関係に基づいてそれぞれの無意識観を簡単に考察する。フロイトは無意識を「超自我」や「エス」の本拠地として、意識的な「自我」をおびやかすものと考えた。これに対して、ユングにとって無意識は、単に意識を脅かすだけのものではなく、意識の劣等機能を補い、心全体のバランスをとろうとする働きをもつ。つまり、フロイトのように「自我」を中心に考える立場では、無意識からのリビドーは「自我」によって操作されないかぎり破壊的なものであるというネガティブな捉え方しかできないが、心全体の全体である「自己」を中心に考えると、「自己」の手に余るような強力なリビドーでも、「自我」の機能的な一面性を補うといったポジティブな面も見えてくると言うのである。このようにユングは、無意識からくるリビドーの中に未来に向けての可能性を見出だしたのであり、このような考えが、彼の自己実現の概念の基礎となっているのである。

次に、両者の相違の原因は、治療対象とした疾患がフロイトが神経症中心であったのに対して、ユングは分裂病中心であったことがあげられる。ユングによると一般に、神経症レベルの患者は個人的無意識内のコンプレックスに葛藤の原因をもち、分裂病レベルの患者は普遍的無意識内の元型を背景とするコンプレックスに葛藤の原因をもつとされる。また、フロイトが科学的な因果律に理論のよりどころを求めたのに対して、ユングは布置や共時性といった概念を用いて因果律で説明できない偶然性をも求め、現象の本質的な意味に、より接近しようとした。布置とは、相異なる領域に出現する非因果的な対応関係のことであり、共時性とは、布置に裏付けられた「意味ある偶然の一致」のことである。これらは、客観的・因果的に証明することはできないが、主観的にその事象に入り込んでいる当事者にとって、ただの偶然とは思えないような事象間の関係を、意味あるものとして認めることで、外的現実と内的現実を関係づけるものである。彼によると、因果律と共時性は、事象を研究する上において相補的な役割をなすものであり、両者はまったく性格を異にする原理であるとされる。このような両者の研究対象及び研究方法の相違が、それぞれの無意識観の特徴を生み出したと考えられる。

5. まとめ

私としては、人間の行動を理解するに当たって、因果律だけでは困難だと考える。それゆえに、ユングの布置や共時性といった概念は重要であり、より深めていく必要があると思われる。また、「無意識」についての大まかな捉え方としては、ユングの考えに賛同するが、その本質を明らかにするためには、言語哲学者・丸山圭三郎氏が述べるような言語との関係や、東洋思想に見られるような日常的な心身の在り方との関係などが、今後の課題として残されている。

また、『本当に「無意識」は存在するのか？』『「意識」と「無意識」の間に境はあるのか？』といった問いも考えられるが、少なくとも現時点においては、「無意識」という仮定概念を立てることは、人間の行動を理解する補助をするものとして有効であると思われる。

参考文献

- ①フロイト 著作集 I 『精神分析入門』（人文書院 1971）
- ②河合 隼雄 『ユング心理学入門』（培風館 1967）
- ③河合 隼雄 『宗教と科学の接点』（岩波書店 1986）
- ④織田 尚生 『深層心理学』（放送大学教育振興会 1987）



VII

総合研究所

甲南大学 総合研究所報

甲南大学総合研究所

神戸市東灘区岡本8-9-1 電話(078)431-4341

人間の深層心理と社会の深層構造（深層心理研究）
（甲南大学総合研究所 研究番号24 1989年4月発足）

◎研究内容の概要

人生観・世界観の喪失の下に、現代に生きる人々は人間疎外を経験している。それは単に人生の目的や社会の進行方向の喪失を示すのみならず、人間存在自体が危機状態にあるといえよう。その主要な原因は、文化・学問における実体化された合理主義的思考方法（例えば、文化・学問のフェティシズム）によるといえる。

そこで、本研究の目的は、そのような硬化した知的枠組みを水平・垂直軸から捉え直し、再構築することを意図する。つまり、一方で、文学（象徴主義・ロマンティシズムの再評価）、哲学（合理主義批判）心理学（呪物崇拜批判）、医学（健康至上主義批判）、経済学（金銭至上主義批判）等の諸分野が交流をもつとともに、他方、それぞれの分野における深層構造を多層的に明らかにし、合理主義、非合理主義の枠を越えた知のパラダイム転換を行う。

◎研究の特色

深層心理の問題を、単に「人間の深層心理」のみに留まらず、「社会の深層構造」にまでパースペクティブを拡げて考察する。そのため、前者については、文学、哲学、心理学、精神医学の諸見解を検討し、後者については、人間が置かれている「場」としての社会を、経済発達、社会病理、大衆心理、環境医学の諸問題を通じて吟味することによって、その深層構造を明らかにする。そのような個と全体の深層構造を分析することが、本研究の特色である。

◎研究の必要性

人間の深層心理と社会の深層構造を総合研究することによって、新しい学問の再構築と人間疎外の解消がなされよう。現代においては、このような総合研究が強く要請されている。

◎研究チームと研究分担

佐藤 明雄（文） 心身論新考
谷本 泰三（文） アメリカ文学と非合理的世界

- | | | | |
|-------|----|--------|------------------|
| 織田 | 尚生 | (文) | 人間における深層心理 |
| 寺島 | 樵一 | (文) | 文学表現における象徴性 |
| ○谷口 | 文章 | (文) | 新・心身関係論 |
| 森 | 茂起 | (文) | 心理学における現実と非現実 |
| 永友 | 育雄 | (経) | 経済学における非合理的要因 |
| 藤本 | 建夫 | (経) | 都市化の大衆心理 |
| 中川 | 米造 | (滋賀医大) | 医療のミトロジー |
| 氏原 | 寛 | (大阪市大) | 意識の場 |
| 小出龍太郎 | | (浪速短大) | モーパッサン文学の深層構造 |
| 瀬尾 | 博 | (精神科医) | 精神医学における諸問題 |
| 杉林 | 稔 | (精神科医) | ライフサイクルにおける精神的危機 |
| 小谷 | 英子 | (大阪大) | 人間存在の実存的課題 |

○：研究会幹事

発表要旨

「人間の深層心理と社会の深層構造」

(甲南大学総合研究所・研究会・研究番号24)

研究会幹事 谷口 文章

研究チーム 佐藤 明雄 (文)
谷本 泰三 (文)
織田 尚生 (文)
寺島 樵一 (文)
谷口 文章 (文)
森 茂起 (文)
永友 育雄 (経)
藤本 建夫 (経)
中川 米造 (滋賀医大)
氏原 寛 (大阪市大)
小出 龍太郎 (浪速短大)
杉林 稔 (精神科医)
小谷 英子 (大阪大)

本研究チームは、4月の研究員顔合わせに始まり、平成2年1月の公開講座を含めて、計9回の研究会をもち、いわば“深層文化論”を展開してきた。そして、表層・深層を含めた多層的な文化論へ論議は深まって来ている。

以下、哲学、経済学、文学、医学の各分野から、研究発表の要旨を報告する。

実体論をめぐる合理主義と非合理主義の諸問題

～「人間の深層心理と社会の深層構造」への序説～

(谷口文章・哲学)

近代合理主義は、ギリシャ以来絶対根拠を志向してきた。それは、実体論による真／偽、主観／客観、善／悪などという二項対立によって展開され、前者が正しく合理的であり、後者は誤りで非合理的であると考えられる。特にデカルトによる近代自我の確立は、現代に至るまで知の中心化をもたらし、合理的整合性の下に人間と社会を分析する表層理論を提供した。その結果、潤いある生を硬化させ、人間疎外の社会を創り出すことになった。

20世紀に入り、フロイトが非合理的無意識の病理学を提示したが、

それは合理的実体論から非合理的なものをも解明し得る構造的関係論への必然的移行を示唆した。したがって次の課題は、無意識の非合理性を臨床のレベルから「人間の深層心理」の論理へ、つまり知の脱中心化の試みに発展させ、さらに惰性化・硬直化した社会制度や文化の死角を明らかにする「社会の深層構造」の論理が攻究されねばならないであろう。

経済学における非合理的要因について
～一般均衡学説を中心に（試論）～

（永友育雄・経済学原論）

経済学にはいりこんでいる非合理的要因を、ここでは二つに分けて考えてみよう。第一に、経済の現実の中にはたくさん非合理的要因が作動しているが、経済理論はしばしばそれを無視する。これを第一の非合理性と呼んでおこう。次に、研究者が無意識の中にもっている要因が、たとえば無意識の願望が研究の中に忍び込んで来て研究の内容に働きかけてくることもあるだろう。これを、第二の非合理性と呼んでおこう。この報告は、この二つの非合理的性を一般均衡学説の中で見てみようというわけである。

第一の非合理性は、主体均衡論の中に見ることができよう。

では、第二の非合理性はどうだろうか。ここで報告者は、80年余りの年月をついやして完成してきた一般均衡学説の背後には、一般均衡状態が現実を実現して欲しいという人間の願望がひかえているのではないかと推量する。これを、第二の非合理性とみることはできないだろうか。

ハーマン・メルヴィルの反合理主義精神 （谷本泰三・米文学）

知覚力の及ばぬ領域を目指すアメリカ文学の主流は、反合理主義精神に貫かれている。メルヴィルの『バートルビー』はその代表作である。ウォール・ストリートの法律事務所で書類をコピーする仕事に雇われているバートルビーの沈黙は、reasonとcommon senseを拠り所とする弁護士（語り手）の饒舌さが解明しえない深淵を暗示する。弁護士の敗北は経験論的実証主義の敗北である。この作品は、アメリカの合理主義的民主主義に暗影を投ずるとともに、理性では不可解である実在を無気味に暗示する。言語障害者バートルビーは、合理主義が入り込むことのできない霊的次元を体現するのだ。ここでは、言葉は真理に到達する手段とならない。言葉を放棄した男は、語り手の空しい饒舌（これも一種の言語障害）の向こうに、無言の影となって現れるのである。『バートルビー』は、語らねばならないことを語る言葉を失った人間の有限性を見事に示した作品である。

異文化としての分裂病～一症例を通して～ (杉林稔・精神医学)

分裂病は、腹痛や発熱などのいわゆる身体疾患とは違い、器質的原因が未だ不明の病である。これは、分裂病者の生き方と不可分であるため、感染症などのように“分裂病”という異物に取り付かれていると考えるのではなく、生きた歴史の表現すなわち分裂病という事態を生きていると考えられる。

このような事態は、単に<狂気＝非理性>ではなく、一定の秩序とまとまりを示している。その意味で、分裂病者を異端者として排除するのではなく、異文化に生きる者としてとらえ、共有の世界をもてば、コミュニケーションは十分可能である。また、従来は病前性格として論じられてきた分裂気質をウェイ・オブ・ライフとしてとらえ直すとき、文化的少数者である分裂気質者が精神的失調を起こして分裂病という異文化を生きていることとなり、その事例性は母体文化との軋轢の度合に応じた結果であることが理解される。

以上について、症例を通じて考察する。

人間学的精神医学における人間観

～V.E. フランクルのロゴセラピーをめぐって～

(小谷英子・医学概論)

人間学的精神医学に位置するロゴセラピー(実存分析)について、「Homo patiens(苦悩する存在)」の概念を中心に、その礎である人間観を考察する。

フランクルの人間観は、臨床や強制収容所体験での実感に根差しており、医学的な異常/正常、精神分析的な意識/無意識ないしエス一元論をも超えている。なぜなら、人間は、病/健康あるいは限界状況/日常にかかわらず、真理や苦悩やよろこびを体感しているからである。つまり、“生の意味についての意志の自由性”を本来的に内在させている人間観がロゴセラピーの背景にあるため、因果律に従っていると考えられる心身的有機体の次元に加えて、彼は「精神 Geist」の次元を強調するのである。

Homo patiensの概念には、このような彼の人間観が生きられるための理念として集約されていると考えられる。従って、これを健康という医学的価値において評価するとともに、“未完成の完成”である生き方の指針として結論づけたい。

文学作品のイメージをめぐって

(寺島樵一・国文学)

文学作品に表されたイメージを考えると、伝統的なイメージ論のイメージの問題の捉え方は、表現という表層と、内容という深層の対

立的な把握、という問題の設定が前提となっている。しかしながら近年の言語理論を援用した文学理論が扱っている、表現における表層と深層の問題は、このような伝統的なイメージの議論では片付かない問題の所在を明らかにしている。

日本の古典和歌において、その課題は多く「何を（どのような思想を）表現するか」ということよりも、「いかに表現するか」が優先してきた。しかし一方では、象徴主義の文学論の広まりにより、「何が表現されているか」を問う、いわば深層的な理解の仕方も未だ広範に実践されている。表層的な解釈と深層的なそれとの間の問題を新古今時代の二つの歌を例にとり、両者のもつ問題をそれぞれ考える。

医療の神話

（中川米造・環境医学）

近代医学は、その起源を16C半ばの法王庁の禁令を無視した解剖に求め、解剖学によって明らかとなった身体内部の異常や変化が病気の本体である、という神話を19Cに確立した。屍体解剖を起源とするこの考えは、病気は病者自身ではとらえられない体内にあるため、専門家としての医師に自身を委託すれば安心という神話をさらに生み出した。また、病気を診て病人を診ない医学や、神のような万能さをまとった医師と人権を剥奪されたアノニムな患者という医療関係もここに起因している。

近年の様々な調査からは、罹患率の推移が近代医学の発達に比例していないことや、医原病が指摘され、これまでの医療の神話は今や崩壊しつつある。“病い”の主体になり得る私たちが、健康の重要なファクターである環境や行動に目を向け、医療に参加するならば、硬直化した神話は賦活化し、躍動する神話へ転化する。このとき“癒し”としての真の医療が新たに生まれるのではないだろうか。

ピューリタニズム・原始仏教・新新宗教

（藤本建夫・経済政策）

石油危機あたりから日本の若者たちの間で宗教がブームとなった。彼らは現代の豊かで合理化された社会のなかで生と死への言いようのない不安に捕えられている。M. ウェーバーはかつて『プロテスタンティズムの倫理』の末尾で近代化・合理化の果てに「精神なき専門人」の登場を予言し、また「中間考察」において宗教なき時代の生と死の無意味化に言及した。そして彼は『ヒンドゥー教と仏教』のなかで永久に流れる時間の超克に救済を求めた原始仏教の世界を分析したが、彼はそれを通して近代合理主義のもつ負の問題性を我々に伝えようとしたのではないか。

研究発表

実体論をめぐる合理主義と非合理主義の諸問題
～「人間の深層心理と社会の深層構造への序説」～
甲南大学 文学部 谷口 文章（哲学）

本研究発表は、「人間の深層心理と社会の深層構造」の研究会の位置づけと、日常生活で個人と社会において気づかない「見えざるもの」を明らかにするための論理と示唆することを目的としている。

以下がそのレジュメである。

まず現代に至るまでの合理主義的思考の概観、次に人間の意識されざる世界の分析、最後に社会の見えざる体制構造の分析が行われる。そのような分析すべてにわたってが可能となるためには、実体論を形成してきた合理主義的思考から構造を中心とする関係論への移行が要請されよう。

1. 近代合理主義思考の系譜
2. 人間の無意識：非合理主義の分析 I 「人間の深層心理」
 - (1) フロイトの無意識
 - (2) ユングの無意識
 - (3) 人間の深層心理から社会の深層構造へ
3. 実体論の構造と新しい関係論パラダイム
 - (1) 実体論の成立対生きられる世界
 - (2) 実体論の構造と問題点
 - ① 実体論の構造
 - ② 実体論の陥穿
 - (3) 実体論から関係論へ
4. 社会の無意識：非合理主義の分析 II 「社会の深層構造」
 - (1) 深層心理と深層構造
 - (2) 構造論における関係論
5. おわりに

ハーマン・メルヴィルの反合理主義精神
甲南大学 文学部 谷本 泰三（米文学）

知覚力の及ばぬ領域を目指すアメルヴィルリカ文学の主流は、合理

主義精神に貫かれている。メルビルの『バートルビー』はその代表作である。

ニューヨークのウォールストリートにある法律事務所へ求人広告に応じて一人の男が現れる。病人かと思われるほど青ざめ、救いようもない孤独の影を漂わせた男だ。バートルビーである。彼は、まるで、長らく飢餓状態にあった者が食べ物にありついて、これを貪り食うように、無味乾燥な法律文書を、大量に敏速にコピーしてゆく。黙々とコピーするバートルビーの驚くべき仕事ぶりは、先に雇われていた三人の男たちの中途半端な仕事ぶりとは比べて顕著である。雇い主である弁護士（語り手）にとって嬉しいことである。しかし、やがてバートルビーはコピーの仕事拒否してしまう。そして、ついにはその一切の業務をも拒否するようになる。彼は一日中ぼんやりとももの思いに沈む。雇い主である弁護士は、当然その理由を問いただそうとする。しかし、「拒否する」という意思表示以外、発話行為さえやめてしまうバートルビーの沈黙に、語り手はなす術もなく困り果ててしまう。無断で事務所に寝起きしていることを、咎られても出て行くことを彼は拒否する。やむなく、弁護士は事務所を引き払い別のところへ移転する。まったくの放浪者となったバートルビーは、刑務所に収容され、やがて食事をすることさえ拒んで死んでしまう。

この弁護士は18世紀の合理主義精神の申し子ともいえるべき人物である。実証主義者であり化学者であったプリーストリを読み、ニュートンの論理を駆使したエドワーズの意志論を読む弁護士は、18世紀知性人の合言葉 *reason* と *common sense* という語を繰り返して用いる。合理主義の世界に生きる語り手は *reason* を拠り所としてバートルビーに対する。しかし、組織的手順に従って能率よく仕事を運ぶことが得意と自認する弁護士は、自分の理屈に合う枠のなかにバートルビーを位置づけることがどうしてもできない。そこで彼はバートルビーを特別クラスに入れてしまう。亡霊である。合理主義者であるこの弁護士の矛盾した姿勢をここに見る。彼の *reason* では定義できないバートルビーを、彼の *reason* が本来ならば拒否する筈の亡霊と定義するのである。彼は「死人のように青ざめて (*cadaverous*)」とバートルビーの容姿を描写する。また、大声で怒鳴りつけるとバートルビーは「まさに亡霊のように (*like a very ghost*)」衝立の向こうから「現われ (*appeared*)」また「すっと消える (*mildly disappeared*)」というのである。そして、バートルビーは *apparition*、*incubus*、そして *ghost* と呼ばれるのである。

亡霊のイメルヴィルジで語られるバートルビーとその沈黙は、理性には不可解である実在とその深淵を不気味に暗示する。そしてこの合理主義者の饒舌な語りとはバートルビーの沈黙との対比は、熟練弁護士の敗北を暗示しているのである。それはとりもなおさず経験論的実証主義の敗北を暗示するものであるのだ。

新古典主義の時代と呼ばれる18世紀が、キケロに代表されるローマの論理学や修辞学に傾倒したのは周知のことである。ローマの弁論術の大家に代表される文化遺産を体質的にうけついで「バートルビー」の語り手は、自分の法律事務所にその胸像を置いている。メルヴィルが用意したこの小道具には、多くの批評家が見落としてきた重要な意味が託されているのだ。

バートルビーの拒否にたじろぐ法律家は、この不思議な人物の正体を明らかにしてやろうとして、査問をこころみる。そのとき彼が占めた位置は、麗々しく飾ったキケロ像 (my bust of Cicero) が「ちょうど私の頭の後ろ、6インチ程上」にあるところだ。彼のいう my bust of Cicero (下線は筆者) は飾り物への単なる言及だ、とって済すわけにはゆかぬ意味が込められている。彼の態度は、虎の威を借りる狐、というべきものなのだ。弁護士背後には法学の偉大な権威、弁舌の達人キケロがいるのだ。そして、彼はバートルビーに身元を明らかにせよ、などと検察官まがいの問いを投げかけ、答えを迫るのである。

次にこの問いかけを無視するバートルビーの視線に注目しよう。彼は訊問する男の顔を見ようともしない。検察官まがいの男の顔のすぐ上にあるキケロ像にその視線をじっと据えたまま、一言も発しないのである。弁護士はバートルビーの視線に気づく。そして彼はバートルビーの表情に出た微妙な変化にも気づく。

しかし、せっかくの観察も、バートルビーの表情の変化をみとどけるだけにとどまる。彼の観察は、この無口の男には、何か言いたいことがあるのかもしれないという思いへとはつながらない。ましてや、この男に言いたいことがあるとすれば、それは一体どういう事だろう、と思いをめぐらして見る創造力など彼にはあるはずがない。ここは、作品中もっとも緊張した場面であり、非常な集中力を読者に要求する場面でもある。

論理を組み立てるためのレトリックを拒否し、さらに、理性までも拒否するバートルビー、それどころかデモクラシーの仕組みそのものを拒否するバートルビーは、それらを支えている基盤、つまり古代ローマ以来伝承されて来た西洋文明の基盤、ともいうものと今ここで対峙するのである。ところがキケロの胸像を凝視するバートルビーの心のつぶやきに耳を傾けてみようとする想像力はこの弁護士にはない。18世紀論理の規範であったローマの法律家に向かって投げつけるバートルビーの心のつぶやき、たとえば「あなたが弁論の才を駆使して、法律家として名声を博したのは幸いでした。でも、悲しいことに私は、言葉が通じなくなってしまう暗い現実を体験したのです。」というようなバートルビーの内なるつぶやきを想像してみる感性など、この弁護士の合理主義にはありえない。バートルビーは論理を拒否するが、弁護士は詩的情動を拒否するのである。彼にバートルビーの心の底な

しの奥行きを測ることなどできるはずがないのだ。こうして、詩的想像力を欠く男を語り手に仕立てたメルヴィルのアイロニーは、作品に深い立体感を与えることとなる。

この作品は、アメルヴィルリカの合理主義的民主主義に暗影を投ずるものである。言語障害者バートルビーートルビーは、合理主義が入り込むことのできない霊的次元を体現するのだ。ここでは、言葉は真理に到達する手段とならない。言葉を放棄した男は、語り手のの空しい饒舌（これも一種の言語障害）の向こうに、無言の影となって現われる真実を暗示しているのだ。「バートルビーートルビー」は、西洋言語文化に対するメルヴィルの鋭い批判の表明である。それは、語らねばならないことを語る言葉を失った人間の有限性を見事に示した作品なのである。

文学作品のイメージをめぐって

甲南大学 文学部 寺島 樵一（国文学）

文学作品に表されたイメージを考えると、従来のイメージ論では、それを三つの方向から論じるのが一般的である。ひとつは作り手または読み手の心理におけるイメージ作成作用のメカニズムとでも言うべきもの。次には、表現におけるイメージの諸相、特にそれは比喻関係という修辞の問題に深くかかわっている。最後が表現そのものの意味（象徴的な）の議論である。このようなイメージの問題の捉え方は、つまり表現という表層と、内容という深層の対立的な把握、という問題の設定が前提となっている。しかしながら近年の言語理論を援用した文学理論が扱っている、表現における表層と深層の問題は、このような伝統的なイメージの議論では片付かない問題の所在を明らかにしている。

日本の古典和歌は、その表現における表層と深層の問題を考える際、その表現の課題が多く内容というよりも表現そのものであったために、表層の深層にたいする優位を説くうえできわめて都合の良い例となってきた。すなわち古典和歌の課題は多く「何を（どのような思想）表現するか」ということよりも、「いかに表現するか」が優先してきたからである。

しかし一方では、象徴主義の文学論の広まりにより、「何が表現されているか」を問う、いわば深層的な理解の仕方も未だ広範囲に実践されている。その一例を、新古今和歌集の慈円の著名な歌「わが恋は松を時雨の染めかねて真葛が原に風騒ぐなり」にとってみると、従来の解釈は、この歌の表現価値を、読み手に恋の心象風景を喚起する点（表層が深層を現前する点）に求めるのが一般的である。しかしこの

ような深層的な解釈は、この和歌が高い評価をえたその当時の状況の真実はおよそ伝え得ていず、実際には、この歌とそれまでの表現の伝統の關係が明らかにされたとき、伝統的な表現の異化を通して、この歌の表現価値が生じて来ている実情が分かるのである。これは表層的な解釈が有効に働く例となるであろう。

ところが今ここでもう一つの例である、定家の「行きなやむ牛の歩みに立つ塵の風さへ暑き夏の小車」という歌を見ると、当時不評をかったこの歌は先行作品との關係性の中でその表現価値が初めて気付かれるというものではなく、やはり深層的にその意味（表されたイメージの仏教思想との結び付き）が、時代を超えて伝わって来るところに、今日でも優れた歌として考え得る理由があると思われる。しかし定家の時代ののちに盛んになった連歌の例をふたたび考えてみると、そこにはやはり深層（思想的な内容の深さ）にたいして、表層（表現）が優先するという現象が認められ、定家の歌から帰納される予想を打ち消すようなことになっている。

深層への関心の不在と見えるような以上の例を考えると、ひとつの解釈としては、古典和歌においては、「何を和歌で詠むか」という課題を不必要としている、作品の背後にある大きな古典的合意があり、その深層の上に成立した表層的な表現行為ということが考えられよう。さらにより根源的に深層の意味そのものをも検討の対象とする議論も想定されねばなるまいが、それはこれからの課題とする。

経済学における非合理的要因について

～一般均衡学説を中心に（試論）～

甲南大学 経済学部 永友 育雄（経済学原論）

1. おことわり

ここでとりあげる一般均衡学説は経済学説のなかの一つであって、このほかにもたくさんの学説がある。したがって、ここで報告するようなことが、他の経済学説についても常にあてはまるというわけにはいかない。ここでは、「経済学説のなかの一つである一般均衡学説をとりあげてそのなかに働いている非合理的要因について」考えてみようというわけである。

また、この報告はあくまでも「試論」であって、このように考えてみましたけどどんなものであろうか、ご批判ねがえれば幸甚という気持ちのものである。

もう一つ申し述べれば、私は、人間には合理的な面と非合理的な面の両面があるが、合理的なものは良くて非合理的なものは悪いというように言うてしまうことはできないだろう、とこのごろ考えているの

である。

2. 二つの非合理性

一般均衡学説では二つの場面で非合理的な要因が働いているように思う。

a) まずこういう面がある。人間には非合理的に行動する面があり、このことは当然ながら経済行動にも影響してくる。ここに見られる人間の経済行動の非合理的な面を全く無視して議論が組み立てられている、という場面をこの学説に見ることができる。

一つは、家計 (household) の行動を考える場合に、家計の欲望の構造 (効用関数) がはっきり確定していて、家計は自分の効用の極大化にもっぱら努める、という議論が展開される。ここに家計の行動の中に当然に混じっているはずの非合理性が排除されて、効用極大化の合理的な理論体系が成立するわけである。

もう一つは、企業 (firm) の行動理論の中に見られる。そこでは確定した生産関数 (生産技術) をもっている企業が、その生産技術を用いて利潤を極大化するありさまが理論化されているのである。企業は果して確定した生産関数の下での利潤極大化にしか関心を持たないであろうか。時には周囲から非合理だと批評されるようなことにも関心を示すのではないか。とすれば、このも特定の一面 (利潤極大化) にだけ焦点をあてて合理的な理論が展開されていることになる。

この家計と企業についての二つの理論には、家計と企業についての非合理的な面を無視して合理的な理論を展開している点で共通なものがある。ここに私たちは一つの非合理性を見ることができる。これは「非合理面無視の非合理性」であり、ここで第一の非合理性と呼んでおこう。

b) 次に、事実を説明する理論を探求しようとしている研究者がいて、その研究者が意識的あるいは無意識的にいっている願望が、理論をいつのまにか事実とは合わないという意味で非合理的理論へと導いて行く、というようなことはないだろうか。事実を説明する理論をもとめる営みの中でこのような願望の働きがあるとすれば、これもやはり一種の非合理性と言ってもよいかもしれない。これを第二の非合理性と呼んでおこう。実は、このような第二の非合理性も一般均衡学説の中に潜んでいるのではないか。なんだかそのように思われるのである。

3. 素朴な議論

最もシンプルな議論をとりあげよう。一財市場の需給均衡論である。

横軸に需要量と供給量を測り、縦軸に価格を測る二次元の平面において、右下がりの需要曲線と右上がりの供給曲線とが描かれて、その交点が均衡点であり、その縦座標は均衡価格を示し横座標は均衡需給

量を示す、という議論である。これはまことにシンプルな議論である。世間に余りにも知られすぎていて、まことに素朴でなんの問題性にも気が付かないほどである。

だが実は、ここにも第一と第二の非合理性はすでに働いているのであるが、あまりにもシンプルで素朴な議論なので気が付かないだけのことである。

少しうるさく議論してみよう。

実は、右下がりの需要曲線と右上がりの供給曲線の背後には第一の非合理性がひかえているのである。需要曲線は価格が下がれば需要が増え、供給曲線は価格が上がれば供給が増えると言っているのだが、このことを背後で支えているのは家計と企業の合理的経済行動である。図式があまりに簡単なため、なんだか直感的にすべて分かったようになって、気が付かないだけなのである。

では第二の非合理性はどうだろうか。実はこれも存在して働いている、と私は思っている（推量している）。この素朴な図式の場合には普通ふれられることはないが、この図式で価格決定を考えるのなら、そこには競売買の取引装置が想定されているものとせねばならないだろう。すると均衡価格が出来値であり、この値段で取引が行われる。ここでは需給は一致しているから売れ残りもないし品不足もない。メダシメダシである。実はこのようなメダシメダシの状況を価格を問題にする研究者は無意識のうちに願っていたのではないだろうか。だからこのような需給均衡価格論が出来上がってきたのではないだろうか。私にはなんだかそのような気がしてきた。だから私はそのように推量するのである。

4. 壮大な体系

一財市場の需給均衡論は一般化されて一般均衡理論となる。ここまで来ると、その理論の壮大なエレガンスに圧倒されてしまいそうになるのが心配なくらいである。だが、ここまで来ると問題の二つの非合理性が演じている役割はいよいよはっきりしてくるようになると思う。

どのような一般化かということを一言でいえば、一財市場の理論から多数財市場の理論へと一般化することだ、と言える。一財の市場だけを問題にして議論を閉じてしまうのではなく、相互に関連して依存している多数の財をとりあげてその市場を問題にしようというわけである。そのさいに注意しなければならないことは、多数の財をとりあげても、各財の需給をその財だけの関数としてとりあつかえば、それは各財について一財市場の議論を何回もくりかえしただけであって、なんの一般化にもなっていない、ということである。任意の財の需給はその財の価格に依存するだけでなく他のすべての財の価格にも依存するとおくことによって一般化は遂行され得るのである。

家計は今や所得を持って多種類の財を購入しようとして現れる。所

得の範囲内で効用を極大にするように多種類の財を購入する理論が示されることになる。勿論ここに第一の非合理性が働いている。そしてここでは、ある財の需要は総ての財の価格の関数であることが明らかとなる。

企業についても同様である。生産関数を条件として利潤を極大にする企業行動の理論が定式化されるのである。ここでも第一の非合理性が働いていることは必定である。そしてここでは、企業が需要したり供給したりするどのような財も、その需給はすべての財の価格によって影響されることが、明らかとなるのである。

これらは一財市場の図式での需要曲線や供給曲線の一般化と言ってよいものである。

さて、財毎に、すべての家計や企業の需給を合計すれば、すべての財について財毎の社会的需要関数と社会的供給関数が得られる。どの関数もすべての価格の関数となっていることは言うまでもない。

そこで市場が問題になる。そして、すべての商品（財）の社会全体としての需給が、同時に、それぞれの商品毎に、一致（均衡）するように問題が設定される。そこに現れるのが一般均衡の価格体系（均衡価格体系）である。この均衡価格体系で取引がいっせいに行われるのである。多数財の市場において、総ての財について、売れ残りもなく品物不足もない。多数財市場の全体にわたって例外なくメダタシメダタシである。

では、そのような均衡価格体系はどのようにして市場に現れるのだろうか。競売買による取引制度によって、というのが通説の答えである。この制度の中に安定装置がついておれば、呼び値の変更を続けながら、市場はついには均衡価格体系にたどりつくことができる。メダタシメダタシの状態にたどりつくわけである。

だが、このような装置に依拠する議論は全く非現実的であろう。私たちのまわりの重要な価格はそのような装置とは無縁であろう。にもかかわらずこのような議論（一般均衡学説）が現れた。いったい何故だろうか。これは私にとって大いなる疑問であった。何故なのだろうか。ここで私は推量を重ねることになる。そして一般均衡学説に伴う第二の非合理性を見ることになるのである。

5. 推量

一般均衡論の研究者の方々は無意識のうちに均衡価格体系が現れてくれることを願い続けたのではないだろうか、いやそうであるに違いない。これが私の推量である。交換によって有無を相通じなければならない人間にとってこの願望はまことに自然である。少しもおかしくない。一般均衡学説はこの願望に支えられて生まれてきた願望理論なのである。

これは私の推量である。一般均衡論の専門家の方々が自分達の願望

によってこの学説を完成したのだ、と述べているわけではない。だから私の推量は実証できないだろう。また論理必然的な議論で論証もできないだろう。だが、この推量によって、この学説の意味が分かってくるように、私には思える。(平成元年七月七日の報告の要旨)
(H. 2. 2. 22)

「異文化としての分裂病～一分裂病患者を通して～」

精神科医 杉林 稔

分裂病状態とはどのような体験なのか。「分裂病は患者の自己にとって単なる異物とみることのできる疾患ではない。分裂病の諸症状は、自己の外部から異物として苦痛を与えるだけのものではなく、自己そのものの存立基盤をゆるがすような恐ろしい体験・経験である。分裂病における幻覚や妄想の内容は、腹痛や熱などちがって、患者の人生の問題を反映していることが多い。例えば、親が実の親ではないという貫い子妄想を語る患者にはほとんどの場合、病前からつづく親との葛藤が存在している。持続性の被害関係念慮をもつ症例の多くは、病前からの対人的孤立の傾向をもっている。患者は、分裂病という異物にとりつかれているというよりは、分裂病という事態を生きているとみたほうがよいようである」(文献①)と指摘されるように、分裂病は患者の全存在を脅かす体験であると同時に、患者の生き様そのものであるという二面性を持っている。それゆえに、援助の手をさしのべても激しく拒絶されるということにもなりかねない。では分裂病患者に対して治療者に要求される基本姿勢にはどのようなものがあるか。まず、独語や妄想は不安鎮静力をもっており、自己治癒力でもある。このような分裂病患者の持つ自然回復力を大切にし、それを妨げないようにする。また、分裂病患者は「強引さ」と「不意打ち」を嫌うのでそうした対応はなるべく避ける。そして、声は患者よりやや低めに、やや深くする。患者のより深みのある声、より一貫性のある声、より自らの感情を語り、論弁性のより少ない声に合わせる。また、「ひよっとすると」「かもしれない」「としても不思議はない」などの婉曲話法は会話促進的である。病的体験に関しては、幻覚や妄想は「君がそう感じている」という心理的現実を認め、「しかし不思議だ」と、これも治療者の心理的事実を述べる。押し問答にならないように注意する。もっとも患者の言語活動の大部分は健康であり、その部分で多くの対話を行うことが重要である(文献②)。ここで分裂病の世界を異文化として捉え直して、コミュニケートできたケースを紹介しよう。

症例：下子、中年女性。昼夜逆転・聴覚過敏・被害関係念慮があり、

それらのことで厳格な父とのトラブルが頻発し、入院となる。入院時、被害的感情が強く、穏やかに話しているかと思うと突然怒り出す。父は下子に対し高圧的で、下子の神経を逆撫でするようなことばかりを言う。下子も負けずに言い返しているが、父の言葉には確実に傷ついている。

入院後しばらく隔離室使用。粗い言葉を使い、コップやタオルをたたきつけるといった粗暴な行為があり、ちょっとした刺激で攻撃的となる。声高で切迫した話し方で、話の内容がころころ変わり、不信感をあらわにする。隔離室退室後、総室に移りしばらくは温和に過ごす。面接場面では、人の考えが読める、自分が作った歌は全部ヒットする等の特殊な能力があるといった誇大妄想を語る。しかし医師や看護者に対する態度と他の患者に対する態度とは大きく異なるため、他の患者とのトラブルが頻発で、他の患者は下子に恐怖感を抱くようになり、下子はボス化してゆく。他の患者やスタッフとの関係悪化をさけるため病棟を変える。前病棟で看護者によって対応が異なることを衝いて下子が看護者のチームワークを掻き乱したことの反省から、下子の行動を制限し、事務的な接し方を徹底したところ、それまでとは違って変わって温和となった。声を荒げることもない。幻聴は転棟してからぴたっと止んだと言う。その後は順調に経過している。

この症例を通して学ぶべきことは、第一に、その症状の状況依存性の高さである。他の患者との関係が悪化すればするほど被害関係念慮は高まり、個々の看護者の微妙な対応の違いに対するいらだちから攻撃的となっていた。しかし、転棟し、静かな環境と一貫した看護者の対応によって全く症状が消えた（後で分かったことであるが、この時期、下子は薬を飲んだふりをして捨てていたので、薬による効果は考慮に入れなくていいだろう）。また父親の下子に対する態度がただ一方的に常識を押しつけるのみであったことも症状を助長していた。第二に、下子とのコミュニケーションの取り方である。父のように、症状のみに目を奪われ、その異常性をあげつらい、注意するだけでは押し問答になるばかりである。分裂病者・分裂気質者の特性として「あまいな状況が苦手」「融通がきかず、杓子定規」という面があり、下子もまさにこれにあてはまった。それゆえ、あえて冷淡なほどに事務的な対応のみにとどめ、彼女の内面に深くかかわることを控えたことが結果的に功を奏したといえる。

木村は、メランコリー者の体験様式としてポスト・フェストゥム（あとの祭り、もはや手遅れて回復不可能な性格を帯びたもの）的時間性を挙げ、それに対置させて、分裂病的体験の時間性をアンテ・フェストゥム（未来先取的、予感的、先走りのもの）的時間性と規定する（文献③）。そして両者を、正常と異常、健康と病気の区別とは無関係に、人間存在の普遍的な基本構造の両極としてとらえようとしている。このように分裂病者を一個の人間として了解的に理解しようとする

る姿勢は分裂病者とのコミュニケーションを模索するうえで不可欠である。このように、分裂病という事態は単に<狂気=非理性>を指すのではなく、一定の秩序とまとまりを持つものであり、工夫を凝らせば十分コミュニケーションが可能である。分裂病者と接していて、壁のように立ちはだかる隔絶感、手が届かない感じ、プレコックス感を前にして圧倒されながらも、ささやかなコミュニケーションの工夫を重ねるうちに人間的な情感の交流が息吹いていく様は、文化を異にする人々との交流が芽生えていく過程に似ている。その意味で、分裂病者との付き合い方を工夫する上で、彼らを、異文化を生きる者として見立ててみるのもいいだろう。ポスト・フェストゥムの時間性を中心に据えた文化に生きるわれわれにとって、アンテ・フェストゥムの時間の極限に住む彼らを理解し、コミュニケーションを向上させようとする努力は、われわれ自身の時間性を活性化させることにつながるのではないだろうか。

<参考文献>

- ①坂本 典『治療の場から見た分裂病』岩波書店1987
- ②中井久夫「分裂病に対する治療的接近の予備原則」（『臨床精神医学』11巻11号国際医書出版1982）
- ③木村 敏「分裂病の時間論」（笠原嘉編『分裂病の精神病理5』東京大学出版会1976）
- ④中井久夫『分裂病と人類』東京大学出版会、1982

人間学的精神医学における人間観

～V.E.フランクルのロゴセラピーをめぐって～
大阪大学大学院 医学研究科 修士 二回生 小谷 英子

はじめに

科学としての医学が細分化、専門化することによって人間は恩恵に浴してきた反面、ややもすると医学は生物学主義、心理学主義、社会学主義というイデオロギーに陥り、人間存在を「ある要素にすぎないもの」としたり、あるいは量的なもののみ還元してしまうということが少なくない。そして現在、その結果として、我と汝の関係は失われ、人間の尊厳がないがしろになったり、また人間存在の意味が喪失する傾向にある。「人間は単なる物質的な身体存在である」とは言えないように、医学の対象である“人間”の本来的な在り方は、単に心理的存在でも、社会的存在でも、あるいは環境などすべてから完全に孤立した一個の人間でもなく、これら幾つもの次元が交錯した“関係”

によって成立している。そこで、人間に対する科学的研究が進んだ現在、医学概論における人間の哲学的研究は、改めてその重要性が増していると考えられる。

このような研究は、端的に言えば、「人間とは何か」、「人間はいかに生きられるか」、「人間はいかに生きるべきか」という問いに答えようとする思索であり、具体的に言えば、人間の文化性、精神性、自由性、責任性、創造性、宗教性などが問題とされる。特に医学の領域においてこれらの問題は、主として精神医学の人間学的アプローチ（人間学的精神医学）によって扱われ、フランクル V. Frankl のロゴセラピー Logotherapie もここに位置づけられる。

フランクルは、精神医学者としてフロイト S. Freud、アドラー A. Adler に師事し、彼らの業績を高く評価しながらも、環境への適応や、社会への目的性に適った自己形成以上に、内面の十全たる充足や精神的成熟、その発展としての行為などを重視し、哲学者シェーラー M. Scheler らの影響を受けながら、独自の理論を展開している。心の豊かさや新たな価値観が、個人レベルにおいて、社会レベルにおいて求められている現在、彼のロゴセラピーから私たちが学ぶことは少なくないと考えられる。したがって、この小論においては、ロゴセラピーの中核概念と思われる「ホモ・パティエンス Homo patiens（苦悩する存在）」の人間観を考察し、人間が苦悩しながらも固有の状況の中で“よく生きる”姿勢を、健康という医学的価値において評価するとともに、私たち自らの生き方について振り返るきっかけにしたい。

1. ロゴセラピーの理論と実践

ロゴセラピーは、フランクルの精神療法としての臨床と理論の両方を指している。このロゴセラピーのロゴ、すなわちロゴスは、いわゆるパトスと対立的に用いられるロゴスではなく、パトスと一体となった生きたロゴス、つまり「精神的なもの」「存在の意味」「人間性」の意味で彼は用いている。なぜなら、正常／異常、健康／病、主観／客観などの分類に従って診断される従来の医学では、病理学的な心身の有機体を越えた“第三領域 tertium datur”である「精神的な人格 geistige Person」の評価がなされないことから、その状態を医学に補うために、ロゴセラピーは“生の意味へ向かう意志の自由性”を本来的に内在させている人間の在り方を強調するためである。

このことは、ロゴセラピーの三つの基本的概念に表わされている。まず第一に「意志の自由 Freiheit des Willens」において、存在論的な分析の必要な「精神 Geist」を、身体 Leib、心理 Seele という存在的、事実的な実体概念から区別し、さらに遺伝や環境の制約は認めながらも、それらによって決定され得ない精神的構えの自由を、彼は強調している。彼のいう人間の自由性は、遺伝・環境・衝動など“からの”自由であると同時に、責任性“に向かったの”自由であり、第二

の「意味への意志 Wille zum Sinn」においては、この責任性の根拠となる意味や価値への志向性を指摘している。なぜなら、人間の行為は、フロイトのいう衝動（エスEs）などによって決定されるのではなく、自覚の有無にかかわらず、常に“あれかこれか”を選択した結果であると彼は見なすからである。第三に「生きることの意味 Sinn des Lebens」において、人間が意味を見いだすプロセスの行為を価値と対応させ、ホモ・ファーベル（創作する存在）、ホモ・アマンス（愛情深い存在）、そしてホモ・パティエンス（苦悩する存在）という三つの人間観を彼は提出している。この人間観は、以下の表のようにまとめられよう。

＜ロゴセラピーの人間観＞

人間観	意味充足のプロセス	実現された価値
ホモ・ファーベル Homo faber	創造的行為をなす	創造価値 schöpferische Werte
ホモ・アマンス Homo amans	真、善、美、聖、愛 などを実感する	体験価値 Erlebniswerte
ホモ・パティエンス Homo patiens	限界状況において自ら 選択した態度をとる	態度価値 Einstellungswerte

さて次に、ロゴセラピーの理論と実践の背景には、可視的な正常／異常などという現象の量的カテゴリーに代わって、「最も人間的なもの（例えば良心）にかなっている anständig／最も人間的なものにかなっていない unanständig」という質的カテゴリーを彼が設定していることに私たちは注目しよう。そこで、ロゴセラピーを生み出したフランク自身の心的リアリティーを求めれば、「傷つきがたい、傷つきえない人間性」を精神疾患の患者でさえ有しているという臨床場面での実感とともに、ユダヤ人である彼自身の強制収容所体験に行き当たる。

2. ロゴセラピーの源泉であるフランクの強制収容所体験

彼の体験を検討する前に、『夜と霧』『死と愛』などの彼の著作から、収容者の存在様式を整理してみると、以下の三つにまとめられる。

＜収容者の存在様式＞

- ① 自己放棄（内面の完全な崩壊）あるいは自殺によって存在を放棄する
- ② 「期限なき仮の状態」として、未来に背を向け、現在から過去へ向かって存在する
- ③ 永遠の相の下に存在し、人生を意味で充たす可能性を実現する

まず、①の自己放棄と自殺は、近いうちの死がほぼ前提となってい

る収容者が、精神的拠り所を失って心理的に崩壊し、その結果、無反応のまま自らの糞尿にまみれて死を迎えたり、高圧電流の通っている鉄条網に飛び込むなど、自ら死を選ぶ存在様式である。

次に、②の期限なき仮の状態にいる収容者もまた、①と同様に未来を見失うため、凄まじい現在に対しては無感情、無感覚となり、現在を補償する安らぎの場を求め過去の思い出に耽る。しかし、このような現実の価値低下は、さらには人格の価値低下つまり人間性の崩壊を引き起こすため、①に転落する危険性を多分に含んでいる。

最後に③の人生の意味を満たす可能性の実現は、生命飢餓状態にもかかわらず、自らのパンや励ましの声を人々に与えるなどの行為で、フランクはこれについて「強制収容所の人間から〔ナチスは〕一切をとり得るかも知れないが、しかしたった一つのもの、すなわち与えられた事態に対してある態度をとる人間の最後の自由を奪うことはできない」(〔〕は筆者挿入、以下同様)と述べている。

さて、フランクの生き方について、彼自身の体験の代表的な四つのエピソードを中心に検討していこう。

〈例1 収容者に典型的な無感情の体験〉 フランクのバラックで、仲間の一人が死んだ。他の仲間たちはまだ温かい屍体に近づき、残りものの昼食を奪い、少しましな衣服を交換していたが、フランクはただ傍観していた。そして、眼を見開いた屍体にみつめられながらも、彼はやがて運ばれて来たスープを飲み続けた。「苦悩する者、病む者、死につつある者、死者—これらすべては数週の収容所生活の後には当たり前前の眺めになってしまっ、もはや人の心を動かすことができなくなる」のである(1)。

〈例2 妻の面影を通じての愛の体験〉 雪の中の作業場へ向かうとき、フランクは妻の面影に語りかけていた。「たとえそこになくても—彼女の眼差しは、今や昇りつつある太陽よりももっと私を照らす」のであり、やがて「彼女はそこにいる！そこに！」という強い感情にとらえられる。このときの体験について、彼は「多くの思想家が叡知の極みとしてその生涯から生み出し、多くの詩人がそれについて歌ったあの真理を、生まれて初めてつくづく味わった」と述べている(2)。

〈例3 生の意味を支える「超意味 Über-sinn」(意味の存在)への信仰の確立〉 発疹チフスに罹ったとき、フランクは譫妄を恐れ、眠るのを避けた。その間彼は、入所時に放棄させられた原稿の再編成を紙屑に速記で綴り続けた。やがて、熱に浮かされ、死が切迫したように感じたとき、人生は何のためにあったのか自らに問うた。彼に子供はなく、精神的な子供である原稿さえも出版される見込みはなかった。何時間もの絶望的な問いかけの果て、自分の考えを著書として出版するよりも、身をもって生きること、苦しむこと、そして死ぬことが結局大切であるという思いに彼は至った。「もし、〔生きることの〕

意味があるとすればそれは無条件の意味であり、苦悩や死でさえも減ずることのできない意味である(〔〕筆者挿入)と(3)。

〈例4 断念の遂行と使命の続行〉 なり手のない発疹チフスバ
ラックの医者をつランクルが引き受けていた頃、戦線は近づき、逃亡
の機会は増加していた。これを最後とつランクルが回診したとき、危
篤の同郷人はそのこと気づき、希望を失った眼差しを彼に投げかけた。
つランクルはそれを非難のように感じ、かすかだった疚しい感情は深
まり、結局患者たちのもとに留どまろうと決心する。その途端この先
どうなるのかわからないにもかかわらず、彼の気持ちは安らかになり、
再び医者としての仕事に精をだした(4)。

まず、〈例1〉の無感情の状態は、収容者に典型的な存在様式であ
り、その原因は、監視兵の恣意に委ねられた対象への社会的状況の変
化、飢餓・睡眠不足などの生理学的状態の変化、コンプレックスの付
与などの心理学的条件の変化、と考えられている。また、〈例2〉の
妻の臨在感の体験も、環境により生じる幻覚あるいは妄想とも考えら
れる。しかし、人間学的精神医学においては、〈例2〉の妻の面影を
通じての愛の体験や、心身の憔悴にも衰えない〈例3〉の原稿執筆や
生の意味に対する問いかけのような精神的欲求、また〈例4〉の逃亡
の断念のような利他的行為などを、絶望の対極にある生の意味の充足と
して、積極的に評価する。なぜなら、例2から例4のエピソードは、
平穏な日常的な行為以上のことをなしていることを示しており、これ
はすなわち、つランクルのいう「態度価値」を実現する「ホモ・パ
ティエンス」の生き方と言えるからである。

3. つランクルの実存的な生き方とホモ・パティエンスという人間観 の形成

以上のようなつランクル自身の収容所での存在様式から明確にしな
ければならないのは、人間の宿命的な「配置 Stellung」と自由な
「態度 Einstellung」の違いであろう。この配置とは、遺伝的な体質
や素質に環境条件が加わった結果であり、態度とは、精神性の現れと
して選択された、内面的なものも含めた行為で、宿命的な配置からさ
え自由な精神的構えの発露である。四つのエピソードは、つランクル
自身が、典型的な収容者の存在様式である②の期限なき仮の状態と、
数少ない③の意味充足した生の状態の間を往来していることを示して
いるが、彼の生き方を一つのゲシュタルトとして評価してみれば、た
だ生きる以上の“よく生きる”という志向性が明らかである。そこで、
実存的な生き方をしたつランクル自身を証人として、“精神性を放棄
し身体的心理的次元に転落するか”、あるいは“強制状態下において
でさえ生の意味を充たすか”というような態度の自由は、限界状況に
おいてでさえも可能である、いやむしろ限界状況を契機に実現される、
と考えられよう。

4. 限界状況を超えるホモ・パティエンスとしての実存

このような「態度」に至る「転回 Inversion」のプロセスは、フランクルの体験からもわかるように、まさに“苦悩すること”にほかならない。人間は、苦悩によって、自らの存在の限界を身をもって知ること、定立と反定立を止揚する視点を獲得し、人間存在の本質的な悲劇的構造、すなわち病、罪、老い、死などの“観念”から脱却し、それらを含めた生そのものを、真／偽、善／悪、美／醜などのあらゆる二項対立的な概念を超えて体験する。それは、“ありがたさ”あるいは“さいわい”としか名づけようのない生の充溢感と言えるかもしれない。

フランクルは必ずしも明確にしていらないが、以上私たちが見てきたように、ホモ・パティエンスとして人間存在は、三つの異なった次元の経験をしていると考えられる。第一に“苦痛 Shmerz”と名づけられる身体的、心理的な苦しみ、第二に“苦悩 Leiden”と名づけられる精神的な苦しみ、第三に“救い Heil”と名づけられる苦痛・苦悩を透過し、精神が限りなくよく機能して、身体、心理、精神という三つの次元をよく統一している状態のことである。すなわち、ホモ・パティエンスとは、個々人が布置されている固有の身体的、心理的、社会的、歴史的状況の中で、可能態 *potentia* である「自己（無意識の自我）*Selbst*」を現実態 *actus* へと実現し続ける生き方、すなわち“未完成の完成”である「習慣態 *habitus*」として永遠の今を健やかに生きている存在と思われる。

人間存在がホモ・パティエンスと見なされる一般的な見解は、デカルト的な精神的かつ身体的存在である人間存在が、心身の相反する力動的関係によって、“受動的”存在にならざるを得なかったことに起因している。しかし、フランクルの見解においては、能動を越えた積極的な受動を成し遂げる人間存在がとらえられ、精神性、自由性、責任性、志向性といった人間の実存性が強調されている。また、彼のいうホモ・パティエンスは、人間の理性のみ重視した“ホモ・サピエンス *homo sapiens*（理性的存在）”に対する感性の再評価でもある。さらに、限界状況から態度価値の実現にただ一人立ち向かう人間存在であることから、医療者という“ホモ・キュアランス *homo curans*（助け護る存在）”に対立する、患者というホモ・パティエンス（助け護られる存在）の概念よりもさらに根源的な人間実存をとらえていると言えよう。すなわち、フランクルのこの概念は、病に苦しむ人々から、例えば仏教でいう“一切皆苦”のように生、老、病、死の苦しみを避けられ得ない人間存在へと射程を広げ、また、経験から生まれ、実践を支える“生きられるための理念”が集約されたものと考えられる。以上のような、あらゆる人間存在に可能なホモ・パティエンスとしての生き方を、病／健康などのカテゴリーの彼岸にある、“生き方としての健康”という新しい健康概念として評価し、結論につなげたい。

おわりに

医学において、人々の生活実感の根底にあるものを、例えばフランクルのホモパティエンスという人間観として、再評価しなければならないと考える。なぜなら、人間が苦悩しながらも固有の状況の中で“よく生きる”態度を、健康という医学的価値において評価しなければ、医療においては、患者のかけがえのない人生を援助する姿勢は生まれて来ず、さらに福祉においては、弱者切り捨ての対応になるからである。また、環境問題など地球規模の限界状況に差しかかり、同時に生きるこのの意味がニヒリズムに陥っている現在、私たち一人一人が自らの人生をよりよく生きるために、人間学的な仕事から明らかとなった他者の生き方を自ら学ぶことなくしては、人類の未来も、充実した人生もありえない、と考えられるからである。しかし、何よりも忘れてはならないことは、「価値は教えられない、価値は生きられねばならない」というフランクルの言葉であり、私たち自身が、自由と責任の下に、すなわち可能性と限界を意識しながら実存的な生を生きることではないだろうか。

註

- (1) フランクル『著作集「夜と霧～ドイツ強制収容所の体験記録～」』（原著 EIN PSYCHOLOG ERLEBT DAS KONZENTRATIONSLAGER, Österreichisch Dokument zur Zeitgeschichte], Wien, 1947) 霜山徳爾訳、みすず書房、改訂、1971年書、102-103頁、参照。
- (2) 前掲書、123-128頁、参照。
- (3) 前掲書、119-120頁、参照。フランクル『苦悩の存在論～ニヒリズムの根本問題～』（原著 HOMO PATIENS, Versuch einer Pathodizee, Wien, 1951) 真行寺功訳、新泉社、新装、1986年、133頁、参照。cf. Viktor E. Frankl, THE WILL TO MEANING, Foundations and Applications of Logotherapy, New York, 1969, p. 156 (邦訳『意味への意志～ロゴセラピーの基礎と適用～』大沢博訳、ブレーン出版、1981年、193頁)。
- (4) 『夜と霧』151-155頁、参照。

VIII

研究室活動内容

講義概要

演習Ⅰ・Ⅱ：4：通年：

「文化批判」の哲学的研究

哲学の重大なテーマの一つである、精神対身体、理性対感性、客観対主観などという二元論的対立を、どのように乗り越えるべきか。

本年度は、言語論を介在させて「過剰としての文化」を批判し、このような二元論的対立を克服する試みをおこなう。その際、心理学・宗教・経済学などによる「文化のフェティシズム（物神崇拜）」批判を通じて、身体（感性・主観）の真只中にこそ、精神（理性・客観）の場があり、精神の真只中にこそ、身体の場があることを示していきたい。

文化批判の作業をおこないながら、常識や既成の学問が正しいとする事柄が真実かどうかの吟味をし、従来の価値観の転換をはかっているつもりである。

教科書：丸山圭三郎著『文化のフェティシズム』（勁草書房）

人間と心：4：通年：

イマジネーション（想像力）の再評価

バーフィールド・カッシーラー（文学・神話・哲学）とユング・ヒルマン（心理学）という二つの流れに沿って、人間の「イマジネーション」を再評価していく。

従来、狭義の哲学では、理性中心主義によって、イマジネーションの認識能力は積極的に評価されなかった。そのため理性中心主義は学問の硬化を生じせしめたともいえよう。他方、空想力・ファンタジー・イメージとしてのイマジネーションは、現代の心理学の中心的機能と考えられている。しかしその場合、イマジネーションの知的位置づけを確定する必要があるだろう。

本年度は、このような哲学と心理学の二つの流れを統合する形で、イマジネーションを改めて検討・再評価することによって、「心の中に存するイマジネーション」のリアリティを示してみよう。

教科書：エイヴンス著『忘れられた第三領域－イマジネーションの再評価－』（創元社）

哲学概論：4：通年：

哲学とはどのような学問であるか。それを知るには、第一に哲学する私たち自身、つまり“哲学する”人間の問題、第二に哲学は何を明らかにしようとするのか、つまり哲学の内容・対象の問題、第三に哲

学的にものを考えるとはどのように考えることであるか、つまり哲学の方法論の問題を考察しなければならない。そのために存在論（唯物論、唯心論、一元・多元論）を概観し、認識論（経験、理性、観念、真理）を検討する。その後、現代における人間存在の諸問題にまで言及する予定である。

一年間を通じて、知の構築とその呪縛を明らかにし、再び人間と自然との交感を回復し、新たな知の再構築への示唆が得られることを期待している。

哲学（A）：4：通年：

現代の社会を生きていく上で、表面的な豊かさや、一見楽しそうな人間関係によって、私たちは真に心の満足を得ているだろうか。いや、人間観・世界観の喪失が叫ばれる現在においてこそ、ものごとを真剣に考える態度が要請される。そのような態度・考え方・判断・行動基準は、「哲学する」ことによって培われよう。

本年度の講義は、身近な例を検討することから始めて、さらに哲学的な理論を学ぶことにより、各人に必要な人生観・世界観を形成することの一助となれば、と考えている。そのために、一方で、哲学の概念・事実と価値・行為・判断・幸福・言語・生と死などを理論的に講義ノートで学び、他方で、多数の具体的な資料（書物・VTR・スライドなど）を使用して実践面を重ね合わせながら、講義を進める予定。

イメージ・トレーニング：2：前期：藤岡、西田、松尾、斧谷、谷口、森、桜井、上水流、

私たちの心の中で常時働いているイメージについて、それは日常生活ではあまり意識しないので、その種類や働きを、意識して取りだしたり、働かせたりしてみたい。実習を主として、文学にあらわれるイメージ、心理学的に扱われるイメージ、さらには身体感覚として感じられる身体イメージなどを扱う予定である。Bコース全体の基礎的なトレーニングとして予定している。

活動記録

□ゼミナール合宿

◎第十八回ゼミ合宿（1989年3月13日～15日 於：IUSK）

研究発表会

哲学系…広松 渉「新哲学入門」（岩波新書）

心理学系…C・ロジャース「エンカウンター・グループ」

（創元社）

教養系…M・エンデ「モモ」「果てしない物語」

（各、岩波書店）

谷口文章助教授による講演「ミヒャエル・エンデにおけるファンタジー界についての哲学的分析」

エンカウンター・グループ実習

卒論発表会

◎第十九回ゼミ合宿（1989年8月21日～24日

於：霜里農場、丸木美術館）

ゼミナール研修旅行として埼玉県にて、有機農業を实践されている金子美登氏の霜里農場を訪問し、また『原爆の図』で著名な画家、丸木位里・俊御夫妻の丸木美術館を見学、お話しを伺う。

◎第二十回ゼミ合宿（1990年3月18日～20日 於：IUSK）

研究発表会

哲学系…丸山圭三郎「フェティシズムと快楽」

（紀伊国屋書店）

医学系…中川米造「環境医学への道」（日本評論社）

教養系…中橋 実「がんばれコート」（長征社）

谷口文章助教授による講演「精神病理の理論と神経症の事例報告～哲学の視座から～」

プレイ療法実習：フィンガーペインティング、KJ法、自律訓練法、箱庭療法

※IUSK＝関西地区大学セミナーハウス

□深層心理研究会第六回公開講座「医療の神話」

大阪大学名誉教授：中川米造

（1990年1月13日 於：甲南大学10号館10-21教室）

□第四回谷口会（1990年4月29日 於：宇治 鮎宗）

卒業生、現役生、約20人が集い親睦を深めました。

□ゼミ構成員

秋山美紀 (文4) ・坂田佳子 (文4) ・山本たまみ (文4)
天野雅夫 (文4) ・大江正俊 (文4) ・榎本修一 (文4)
川野三佐子 (理4) ・西村由美 (理4) ・深谷昌生 (理4)
辻啓之 (法4) ・阿部哲也 (文3) ・上田雅美 (文3)
平岡未央 (文3) ・松本昌樹 (文3) ・光石好雄 (文3)
村嶋務 (文3) ・辻孝司 (理3) ・村松圭吾 (理3)
小西克弥 (経3) ・井垣博美 (文2) ・北村光子 (文2)
辰巳法光 (文研究生) ・田中素子 (文研究生)
岩田哲郎 (理修2) ・小谷英子 (阪大医修2)

編集後記

1989年度の報告書が完成しました。予定の発行日より約半年遅れとなり、他方面にご迷惑をおかけしましたが、ようやく発行となりました。そのため、最近(1990年)のトピックス等も加わっており、年月のうえて多少のずれはあるかもしれませんが、御容赦願いたく思います。

今回の報告書は、夏季研修旅行においてお会いした『原爆の図』で世界的にも著名な丸木伊里・俊御夫妻の絵で扉を飾ることができ、編集者一同大変うれしく、また光栄に感じています。さらに甲南大学総合研究所の研究員の諸先生方の発表、そして谷口文章先生の「イメージ・トレーニング」の講義内容も掲載されており、充実した内容となっております。

今年度は、上記の先生方や他大学の学生の人達、またゼミ生以外の学生のアンケート等も多く、様々な方々に多大な御協力を頂きました。深く感謝致します。また、編集作業を指導して下さいました諸先輩方、協力してくれた後輩のゼミ生の皆さんありがとうございました。

最後に、不慣れな編集作業を暖かく御指導して頂き、他方面にわたって御指導して下さいました谷口先生に深く感謝致します。

編集者代表：松本 昌樹 天野 雅夫
小西 克弥 光石 好雄
吉川 亜子 木戸 英貴



<1989年活動報告書>

編集者 天野・辻・松本・小西・吉川・光石・阿部・小花
北村・井垣・木戸
発行所 甲南大学 文学部 谷口研究室
☎(078)431-4341
発行日 1990年3月31日
印刷所 甲南学園 総務部 総務課 複写センター
協力 ユニバーサル株式会社

